山とスキー

第七十七號

札幌　山とスキーの會　發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年十一月廿八日印刷納本

昭和二年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第七十七號目次

記事

岡村君の追憶　中野生〔一〕
源さんは永久に歸つて來ないのか　廣田戸七郎〔五〕
追憶　伴素彦〔一〇〕
源さんの印象　宮下利三〔一三〕
岡村の源さん　山口壽一〔一七〕
山と岡村君　山口健兒〔二五〕
黑いネクタイ　相川正義〔二八〕
源さん　坂本直行〔三二〕
サン・モーリツツへ行く友に　木原生〔三五〕
近代的シャンツエの構造　木原均〔三八〕
氷と雪の理學的性質について　加納一郎〔四五〕
樺太東海岸突岨山の植物　平塚直秀〔五二〕
赤岳ノルドグラート紀行　DBH生〔五七〕
スキー靴をめぐりて　高橋昂〔六二〕
利尻山の話　高杉正樹〔六七〕
編輯後記

寫眞版

一、在りし日の岡村源太郎君
一、ヘルペチヤヒユツテ　齋藤丈彦
一、雪華

昭和二年十二月發行

先に板倉勝宣君のために又藤江永次君のために追悼號を出せる本誌は此に三度、十月十九日逝去せられたる同人岡村源太郎君のために本號を輯せんとは。

何故に人の世はかく轉變の常なきか、我々が師と敬し友と慕ひし君が逝去の餘りにも悲しき。アルピニストとしスポーツマンとし將又眞摯なる學究として、他に比を見ざりし君が美しき人格より湧き出し文字は堅實にして、他の模倣をもゆるさゞる獨特の風格ありき。君の本誌に寄せられたる何れも科學的にして必讀のものなりき。

君のスキーディスタンスレースに致せる絶大なる功績は今更云々するを要せず。

君は吾々の期待を荷ふて今春サンモーリツツに開かるべき國際オリンピックスキー競技へ派遣選手として渡歐せらるゝ筈なりし故にその悲しみや更に深し。

此處にさゝやかなる誌面を以て短かゝりし君が生涯の追想に資せんとす。

在りし日の　岡村源太郎君

岡村君の追憶

中野生

運命と云ふものがあるとしたなら、その運命と云ふもの程、惡戯好きで皮肉屋で、而も慘酷なものは無いだらう、と此度程感ぜられた事は無い。

全世界で毎一秒に一人强の人間が生れ、それより稍少ない矢張り一人强の人間が生から追ひ出される相である。然し何も十月十五日の午前五時四十分に、その一人强を撰りも撰つて源さんに與へなくても良かり相に思はれる。源さんが絶望だと聞かされた時は、悲しさよりもいまいましさの方が先に立つた。全くしやくにさわつて仕舞つた。實際醫學の智識の無い私でも、如何とも出來ない成行だ位は判つて居た。居たが「何とかならないものかなあ」と思はされた。「何とか出來相なものだが」と考へ直して居た。次の瞬間には「どうも出來ないなんて、そんな箆棒な、無能な」と考へて仕舞つた。所謂八つ當りの類だがそんな氣持になつた。然し何とも策は無かつた。嗚呼。

愚痴は止さう。そして在りし日の源さんを索ねて見ねばならない。

「他の人は試驗に山を懸ける、出相な所は良く見て出な相な所は下見もせない。然し僕にはそれが出來ない。ノートの第一頁から逐一讀んで行く、判らねば次の頁には移らない。だから試驗の日迄に一つも目を通さない處が殘る事がある讀んだ所はどこでも完全にかけるが讀まない所は全く書かない」と源さんは僕の家の爐邊で語つた時があつた。源さんの

面目をそのまゝ出した言であらう。「ウン君のやり相な事だ、石橋叩いて渡ると云ふが、叩いて渡つた石橋をも一度叩き直して見ると云ふ樣な手合が君だ」と遠慮もなしに僕は批評した。「ダウエルラウフでも自分には未だこうだと言ひ切る自信が何も無い。スキーの長さだつて、蠟の事だつて」と君はその時續けた。前言の氣持が此の言葉の中にも充分見えて居る。源さんは要するに Sicherheit selbst だつた。

「ラウフは自分で見付るものか他人——大抵は親がその他人だが——に見付けて貰ふもんだらうか」源さんのスキー以外の數少ない言葉の一つだつた。全く源さんと話して居ればスキーの事が殆んど全部だつた。「それやあ君、自分自身で探し出す程正確な事はないさ」先輩ぶつて私が答へたつけ。源さんでなかつたら私は他の答をして居たかも知らない。「自分で見付けれや目がくらんでとても正確に成功するものぢやないぜ、他人に見付けて貰ふに限るさ」なんかと、若し他の人になら同じ舌で言つたかも知れない。と云ふのも源さんは間違のない人だつたから如何にもえら相に斷定した迄である。源さんは要するに Sicherheitselbst だつたのだ。

「スタートの前のブルスが幾何で頂上に登つた時のブルスが幾何で、十分休んだら幾何に下つた」「ドライシュリツトが何所では電柱の一區切りに何本だつたが、彼處では何本半だつた」スキーの話によく言つた源さんの言葉だつた。運動家である人は多いが、スタートで脈を計りゴールで計り、てな愼重さの人は少なからう。源さんの生活は、まるでX軸とY軸とではつきり決定される數字の樣に正確で又學究的だつた。完全な Akademiker これが源さんである。

勝負運の惡い源さんは負けても平氣な顏をして居つた。けれども顏色に出ない源さんの心の裡には非常な苦痛と燃え上る感情とがあつた。「しつかりやつて下さい」と學生生活を了る時の北大スキー部の送別會に君は泣いて後輩に叫んだ。

あの涙は四年間耐えて來た涙である。競技に負けてその場で殘念がるのは誰でも出來る。四年間我慢しつゞけるその熱情は、ゴールで涙を流すそれよりも遙に强い深い大きいものである。Leidenschaft 源さんの學究的態度と確實性との中に包まれたものが之であつた。

サン・モリツツでの源さんは我國のスキーの世界的水準を正確に示して呉れる第一の人だと期待して居つた。然し、スウィスの地圖を病床で擴げて輝く希望に滿されて居つた君は遂に逝つた。嗚呼。

源さんと一緒に山地を歩いた事は二三度きり無い。それは源さんが殆んど北大でのスキー生活の大部分を競技で費したからだつた。

逝つた板倉君が多分後藤と一緒だつたと思ふが北大で第二回目の三段山から定山溪に出るコースを歩いた事があつた。歸つた後で、誰が從いて行つたと聞いたら「たつた一人、三角山の往復競走に一番だつた岡村と言ふのが來ただけだつた仲々良く歩くよ」と言ふ樣な事を言つた。源さんの噂が僕達の間に出た最初が之だつた樣に思ふ。

僕が青山温泉の合宿で一班のリーダーをやつた時に源さんが一班だつたか他の班だつたか良く記憶して居らなかつた。がその次の年の合宿で廣田の班下に源さんが居た事は良く知つて居る。身體のコンディションの悪かつたその年の廣田がチセヌプリの下の馬場温泉でヘタバツたので一緒にお伴した僕が後を引きうけてチセの頂上へ行つた。雪の目茶に良い日で十四五人の一行が先頭と殿の間に二三百米も差が出來ても平氣だつたから確に天氣も非常に良い日だつたと思ふ。僕の前に三人かたまつて登つて行つたのがNとA、それに源さんだつた。その三人に追付かうと可成り馬力をかけたがとてもその距離を縮める事は出來なかつた。頂上で「今日はNとAと岡村の三人には完全に押えられた」と僕は白狀したものだつた。この三人にも一人のAとOとが北大のダウエルラウフの開拓者だつたが、AやNは在學期間が短いため、最近迄うまずやつたのが源さんだけだつた。

キモベツ岳からムイネシリを通つて定山溪へ出た時も源さんが一緒だつた。此時よりも、大正十一年春にMやなんかと一緒に中山峠へ遊んだ時の源さんが印象に深い。小屋で人夫が熊の話をした。その中で「熊はキモガヤケテ」と云つたのが可笑いと言つてその明日源さんが笑つたつけ。つまらない事だが此話はよく私の記憶に殘つて居る。歸途定山溪へ出るのに街道に倚らずに初てのコースを歩いた時源さんのラツセルが確に佳境に入つたなあと思はされた。源さんに代つてO

3

がラッセルをやるとすぐブッシュにぶつかつて何時の間にか源さんが先に歩いて居つた。此時に源さんの歩きぶりは感心させられた。源さんが晩年の實力への大きなストライドは此の時分から現はれた樣に思はれる。此旅の最後は汽車が不通で飛んだ喜劇に終つた。定山溪鐵道のマッチ箱の樣な客車の中で一晩明し、明る日の早朝には應援隊の炊出し握飯を喰はされた。源さんは汽車が進もうが進むまいが我關せずの樣な調子だつた。糞の字を頭につけねばならない程落付いたものだつた。も一つ此旅での出來事は、源さんが大正十四年の夏に手術した骨腫を最初に發見した事だつた。膝の横の何とかの骨に大きなコブが出來たのを十四年の夏切り取つた。「何時頃からそんなものが出來たんだ」とその後聞いたら「君と春中山へ行つた時に小屋の中で初て氣がついた」と答へた。發見した時に何一つ云はずに居つた等は無駄口の少ない源さんの面目が出て來る。

たどたどと取りとめもなく書いた。源さんの追悼號に出す程のものでは無い。源さんの靈にも讀者諸君にも厚くお詫びする。

源さんは永久に歸つて來ないのか

廣田戸七郎

岡村君

僕は今君の追悼號への筆をとらうとして居る。然し君の名を想ひ出し、君のあの死の姿を想ひ出すと、筆を進めやうとしても何故か筆が進まない。實際君の名を想ひ出しそして死のあの瞬間を追想する時、僕の頭は只呆然とするばかりなんだ。

もう何から何までが想ひ出の種となつて終つた。樂しく愉快に打ちとけて語つた僕達のグルッペの中で實際君が最も早く他界しやうとは、誰が考へやう。

お互が職を求めて獨立の道に進んで行く時、袂別の悲しみを味ふことがあらうとも、又何時かは廻り合ふ瀬の喜びもあらうに、君は永遠に僕達のグルッペから離れてもう再び僕等と袂を暖うして語り合ふことが出來ないのだ。僕の今の淋しい感じは僕達グルッペの共通の淋しさなのだ。

君の死とそして君の家庭のことに考へ及ぶ時、限りなき哀愁の念が湧いて來る。

僕の筆は斷片的に君の追憶にまで進むであらう。

丁度それは琴似の第一回の合宿の時であつた。

今の京都帝大農學部教授の並河切先生が北大スキー部の部長で未だ獨身の故を以て烏小屋合宿の監督として一諸に同居せられ、今ロックフェラーの研究生として留學して居る後藤一雄君が技術方面の指導役として、直洲と僕の四人でジャムブの合宿をして居た時の或晩の話であつた。

ジャムプをもつと盛んにしたいことは皆の希望であつたが、登山の方にも人物が欲しいと言つて居た時の話であつた。岡村といふムツツリとした馬力のある男が、よく山へ行く、あれがもう少しスキー部の中心に入つて來てくれると末頼母しいが部に入らないかなあと話し合つたことがあつた。その馬力があつて技術の達者なことは、よく後藤君が保證して居た。その時たしか岡村君は未だ豫科一年の時だつたと思ふ。

丁度君が豫科三年の時だつたと思ふ。小樽に第一回の全國スキー大會の豫選があつてディスタンスレースの選手として推薦され、そして參加したのは。

その時リレーの練習の爲に隨分矢釜しく君はディスタンスの方の仲間に催促されて居たやうであつた。

豫選の結果は僕等の學校のリレーチームは二着かで本選に出場する資格を得ることが出來なかつたやうであつた。大會が濟むと同時に君の姿は毎日曜登山の方の連中の中に見られたやうであつた。そして本當にスキーを樂しんで居るやうであつた。此頃チョイ〳〵山とスキーの會に顔を出して來た。そして君がディスタンスレースに力を入れ出したのはその翌年からであつた。君がスキー部に入部して山とスキーの會員になるやうになつて、愈々山とスキーの會通へが繁くなり出して來てからであつた。或日、どうだい源さん、ディスタンスレースの方をみつちりやつて見ないか、俺達はジャムプをみつちりやるから。と僕が云つた時君は「ウーン」と何時もの調子の返事でやるともやらないとも判斷のつき兼ねる口調であつた。

後から考へて見るとその頃の君は所謂選手といふことについて隨分考へて居たことが判つた。そして隨分君自身煩悶して居たやうに思はれる。君が如何なる動機で又如何なる衝擊でディスタンスに敢然志すに到つたかは、今以て想像することは困難である。然し君は此第一回全國大會の豫選以來口には出さなかつたが確かに心中決心をして居たことは第二回全日本スキー選手權大會の北海道豫選會當時の奮鬪と成績とが明かに物語つて居た。

それから後の君のスキー生活は已に多くの人達の知らるる通り熱心そのものであつた。然し考へて見ると君の大會出場は實に不運續きと言つて良い。高田の大會の時は寒冒

の爲に發熱して連日の練習も空しくなつて終つた。大鰐の競技の時は餘りに考へ過ぎた結果却て禍を招き、樺太の際は之亦札幌での足關節負傷の爲に絶對優勝の榮譽を棄てざるを得なかつた。然し君が一歩一歩不運、不遇と戰つて堅實な基礎を築いて行つた處に君の偉大さがあつた。君の理論と實際と相平衡せる研究、而もその科學的なそして系統的な研究が到底他の追從を許さぬものであつた。君が競技なるものを如何によく理解し、そして本當のスポーツマンらしく振舞つて居たか、それ等は君の遺した運動競技の勝利を一讀するならば自づと理解せらるゝ處である。

君が如何に競技に用意周到であつたかは、一度君の競技練習乃至は大會出場の際の持物によつて知ることが出來る兩方の下腹の前を膨らせて何を持つて居るかと見れば一方には穢れ切つたハンケチにワックスを包み、他方にはバンを包んでヅボンのバンドに結んで、何時も走つて居たことは一つの挿話として充分價値がある。

君はよくスキーを穿いた。スキーを下駄の樣にして穿くと云ふことがあるが、君は正にスキーを下駄扱ひにして居た點で僕達仲間の隨一であつた。否恐らく僕達仲間だけぢやあるまい。北海道否日本中で唯一人であつたかも知れない。初雪が降り出してそれが根雪になるのも待遠しい位にしてスキーを穿き出した。そして學校へ通ふ時も朝はスキーを穿いて來て夜山とスキーで遊んで遲くなると暗の中を滑つて家路に歸つて行くのであつた。そんな調子であるから冬中餘程の日でもなければスキーを穿かない日はなかつたやうだ。僕達仲間で百何十日かのスキー滑走記錄を持つて居たのは君の他一人もなかつたやうだ。

馬力の所有者としては已に定評があつた。未だ競技に志す前、山へ出掛けて居た時は何時も默々として一番長くラッセルをやつて居たのは皆の記憶して居る處であつた。何時か細川侯と槇さん一行を案内して手稻山に行つた時、細川さんは君のラッセル振りを見て、ラッセルをやりに生れて來たやうなことを言つて冗談言つて居られたが、實際山へ行つての馬力には誰も感心して居た。

その底知れぬ馬力は、スキーの場合だけに限られて居らなかつた。專門の學業の方にも傾到せられて居た。

君は實際學校へよく眞面目に出て居た。そしてノートを綺麗にとることで有名であつた。君の功德を受けたクラス

の連中は隨分あつた。君の頭の良いことは、クラスの連中は皆知つて居た。然し秀才を得意顔にするやうな愚は決して爲さなかつた。君の謙讓な態度は一度君に接した人は凡べて知つて居る處である。君が秀才で而も努力勤勉奮闘家で同時に謙讓の美德を持つた人格者であつた點では僕達のクラスで異彩を放つて居た。實際君をして、努力奮闘家たらしめたことには種々原因もあらうが、就中君の健康体がさうあらしめたと言つて差支へないかと思ふ。事實君は頑健そのものゝ体格に見えた。だから君を知る多くの友、又は周圍の人達は君の死の轉歸をとつたことを聞いて夢かと思ふであらう。そして嘘ぢやないかと疑ふであらう。君が實際病氣も病氣、到底考へ得られぬ結核にとつゝかれて居たとは神ならぬ誰が知り得る處であつたであらう。

僕達も餘りに君の身体の急變の速かであつたことに驚いた。僕達は實際君が急變してからと云ふものは、何にも手につかなくなつた。そして日が暮れて明くる毎に今日はどうか明日はどうかと隨分氣にせざるを得なかつた。そして君を病室に見舞ふ度に君の病の革つて行くのと、枕邊に連日徹宵看護に身を碎いて居らるゝ母堂の姿を眺めてはそゞろ頭を垂れざるを得なかつた。君は病床にあつて最後の呼吸を吸ひ終るまでスキーのことを念頭から離さなかつた。

君が病床にあつて一粁、二粁と口づさみ乍ら漠搔く樣は悲しき現相ではあつたが、十月十五日朝の隔世せる顔貌を見た時、全く一語を發することも出來ず、僕は生れて始めて限りなき哀愁の感に打たれた。そして友と二人で悌泣した。殊に君と僕とは光榮の平和の使節として多年憧憬れの地瑞西へ旅立つことになつて居たのであつた。派遣選手としての決定を見、そしてその時の互の喜びが大であつただけに、此時味つた悲痛の感は亦此上なく大きなものであつた。

君はもう他界して歸つて來ないんだ。

君はもう幽明界を異にして吾等の元へは歸つて來ないんだね。さう思ふと又悲しくなる。君の死が病死であるだけに嘆はしい。

然し源さん。

君の我が日本スキー界に遺して行つたものは、永久に消えぬであらう。スキーを中心に之に關係ある數々の事共に對する深い研究と、實績とは、永久に我がスキー界への記念物となるものである。

君は恰も我が國ディスタンスレース界の Jüngling 時代にあつて、泣いたり、ジャレたり笑つたりしてコロ〳〵轉げ歩いて居る赤ん坊をすかしたりなだめたりして暖い飲物を與へそして旨い滋養分を多分に與へて漸く物心のつく處まで我が國のディスタンスレース界を Ernähren して來たのでした。その間の苦心とそして困難と犧牲とは全く想像に餘りある。而も君は何時も平和と讓讓の德を以て一意此養育に心を向けて居た。そして多大の努力と犧牲と心勞とを之に傾注することを惜しまなかつた。されば君の一擧一動、一字一句は多くの人達の注目する處であり、精讀吟味する處であつた。殊に君の理論、練習、休息、學問の適當配合による規則正しき生活は到底他の追傚を許さなかつた處であつた。かくして君は北方に於けるディスタンスレースの覇者として將權威者として斷然頭角を表はし、多くの人達の畏敬する處であつた。

今や君が Stufenweise に築き上げ來つた君の尊い研究と体驗との試練の實績を比較すべき絶好の機會に邂逅し、正に長途雄圖を抱いて晴の國際舞臺に心ゆくばかりの奮闘と活躍とを爲し、成果を擧げ多分の收穫を齎らさんとして其日の到るを千秋の想ひを以て指折り數へ、やがて數旬ならんとして母國を離れんとする目捷の期に到り、卒然として長逝して終つたとは、何と言つても惜しまずには居れない。

僕は繰返すであらう。君の死は實際北大スキー部の一大損失であると共に北海道否日本スキー界の一大損失と云つて良い。僕達仲間は君の業績を永久に傳へ、そして紀念する爲に、及ぶ限り報恩の務めを果す積りで居る。

幾多の追憶を生み底止する處を知らない。而も同時に迫り來る悲痛と哀惜の念の高まりに實際僕はもう堪えられない。

許してくれ源さん。

君の死が、君が北大スキー部に入り、そしてディスタンスレースに精進し過ぎたことに少からず起因し、而も北大スキー部入りに否ディスタンスレース入りに遠因を持つて居たとしたならば、僕は君を誘惑した點で、可成り大きな君の死の責任者であることになる。僕はそれに對する充分の責を感じて居る積りである。僕は心から君の靈に追悼の詞を呈し、君の御家族にお詫びして、この斷片的な追憶の筆を閉ぢたいと思ふ。

追憶

伴素彦

病氣つてものを全然知らない頑丈な体の持主の岡村君がこんなに俄に亡くならうとは、誰が豫想し得たらうか。

光榮ある歐洲行を數ヶ月の後に控え乍ら、空しく若死して行く岡村君は、どんなにか殘念であつた事だらう。

風邪も引かない君が、漸つと學窓を出て、オリンピックの派遣選手に選ばれた今年になつて、病床に臥す樣になり然も瑞西・諾威行の燃ゆるが如き希望は、永遠にとげられない事になつてしまつた。

君が同行すると云ふ事は、私には全くよい指導者と頼もしい同僚を持つ事であつた。又日本のスキー界、殊に北大スキー部が君の渡歐に期待する處が甚だ多かつたのだ。

岡村君のスキーに對する熱心と精進とを考へる時、どうかしてもう一年でもいゝから健康であらしたかつた。

熱心に、嚴格にスキーを研究して居た岡村君が、空しく死んでしまひ、ぐうだらな私が、渡歐出來るなんて、全く濟まない事だ。酬いらるべき彼の努力が、こんな不幸に終る事は幾ら考へても殘念だ。どんないい社會が實現したつて、どうしても除く事の出來ない人間苦の一つだとあきらめやうか。

彼の不幸は、單なる彼の不幸のみではない。日本のスキー界の大きな不幸だ。殊に北大の被る不幸は、以前にも、又は此から以後もより大きな不幸は殆どないと云つても差支へあるまい。

君が、研究して來た事は數多く殘されてある。しかし、

未だ君が後進を導くべき事、又新に發見すべき事は多かつたのだ。君が外人に實力を示す事は、北大の大きな望みだつたが、その持ち歸る收獲が、又吾等のより大きな期待だつたのだ。

北大のランナーは、好個の目標と指導者とを失つてしまつた。此が不幸でなくて何だらう。

君の若い生涯を振りかへつて見るとき、よくあれだけ、熱心にスキーをやれたものだと思ふ。恐らく、日本中に彼程熱心にやつたものはあるまい。

シーズン中は勿論の事だ。シーズン外にあれだけのトレイニングは餘程の決心と忍耐とがなければ、實行し得られるものではない。札幌郊外の圓山は君のよい練習所だつた重い靴をはいて、ストックを突き乍ら登る苦しい練習を、アウト・オブ・シーズンにやつたのを思ひ出す。

シーズン外にも君のトレイニングは秩序だつて行はれてゐた。冬季以外に外のスポーツを專門的に行ふ事を、スキーのトレイニングと見ればとも角（例へば、私が平素は野球の選手としてその練習をなし、それでスキーのトレイニングを兼ねるが如き）冬季以外も、純粹にスキーの練習を、君程熱心に、猛烈にやつた人は外國人の中にだつて、あるとしてもほんの僅かしかないだらう。

酒も煙草ものまず、專門の學問以外に行ふ事の大部分はスキーに關する事柄であつた。

勉强とスキー、それが他人から見れば殆ど凡て君の行爲である。所謂道樂のない眞面目な運動家であつた。

君には、スキーが趣味であり、道樂である樣に見えた、スポーツが單なる享樂ではない事は當然だ。人間學、社會學の一だ。單なるブルヂョアジーの消閑的遊びと考へては大きな間違ひだ。單なる遊びとしても、スポーツはあり得るであらう。しかし、私達の行ふスポーツは、單なる享樂ではないのだ。健康の增進とともに、明るい、信實な、純正な强固なスポーツマンシップの涵養なのだ。

樂しいスポーツは、スポーツの一面だ。苦しいスポーツをやらなければ、ほんとのスポーツマンにはなれないんだしかしそれは大變困難な事だ。

私達のスポーツは、兎もすれば享樂へと向ふ。

岡村君の精進は全く偉かつた。彼が、先人のない、經驗の全然ない吾部のディスタンスレーサーとなつての苦心と

研究は實に筆舌に盡す事が出來ない。多くの挿話と良い成果を殘した。「忍耐と努力」此が、岡村君を之までに築きあげたのだ。

無口な、質實な、努力家で忍耐强い彼は、スポーツによつて作られたスポーツマンシップを以て、必ず學問的にも有名な人になり得たであらうに。

約一月の後に瑞西に向はんとする私は、今は全く感慨無量だ。友今はなき、淋しさと頼りなさに。

サンモリツツに、或はその他の土地でスキーをはくとき、「源さんが居れば」と幾度思ふ事だらうか。

しかし、私達は徒になげきはしまい。日本のスキーの爲めに、岡村君の分までも私はこの渡歐によつて收獲して來やう。

「源さんの爲めに」と若いランナーが張り切つてゐるのは涙の出る程嬉しい。

彼の努力によつて漸く目を出した北大ディスタンスレースを眞に盛大ならしめるのは、彼の最も大きな希望だつた「源さんの爲めに」喪章をつけた彼等が全日本大會に、インターカレッヂに活躍するのは岡村君への良き餞だ。

「源さんのために」「源さんの爲めに」北大スキー部員は强く決心してゐる。

* * * * * * *

源さんの印象

宮下利三

僕が始めて源さんに近付きになつたのは忘れもしない十四シーズンの校内大會の日だつた。四キロと十八キロの競爭がジャムブと共に擧行せられると聞いて、僅かに覺えのある腕を振つてやらふと思つて三角のシルバーシャンツエ前に行つた。

その朝は空も空氣も良く澄んで居た。雪が四五寸新しく降つてとても美しい雪だつた。そして悠長な、長閑な鄕土歌が其處で唱はれてゐた。

「押せや押せ押せ樺太迄も
　押せばシャモニイが近くなる」

此の文句がハツキリ聞き取れる處迄行くと、坊主頭に銀鼠のスエターを付け、スエターの左腕には大學のマークを付けた源さんが立つて居た。樺太の大會で二等だつた源さんが腹の底から唱つてる此の唄には、夫こそ本當の意義が籠つてゐたに違ひない。僕が彼の唄を聞いた瞬間。洋々たる前途を眺め乍ら春の美しい雪の上に「……シャモニイが……」を唄つてる源さんの姿が本當に祝福されて見えた。温顏を光らせてニコニコ話し込んでゐる所等殊にその圓滿さが充溢してゐた。

その日のレースが始まる前に、源さんは走る人々に若干の注意を與へ、それから手にしてたスタイグワックスを一人一人に丁寧に塗つてやつて居た。話し振りは御隱居さんの樣にユックリしてゐるんで獅子の樣なスピードと此の源さんとを一緒にして考へる事が誠に變であつた。スポートが

人格の陶冶にその目的が在るとしたならば、此の人こそはスポーツマンシップの体現者なんだらうと、その時僕はつくづくそう思つた事を今でも記憶してゐる。

その日思はぬ氣勢を擧げたので晩の送別會の時に源さんから今後の練習を色々と敎へられた。僕はかふ云ふ人と一緒に頑張るんなら、何少し位の苦しみは何とも思はずに此の好きな道に向つて進まふと決めてその夜は別れた。

此れが源さんと僕との近付いた最初の日だつた。それからと云ふものは毎日とまでは云はれないが兎も角毎日の樣に源さんの尻にくつ付いて色々な事をした。

× × ×

何事に依らず源さんは几帳面な人であつた。彼の練習振と勉强振との要領の良い熱心な樣を見たら大抵の人は、そのエネルギーと意氣とに頭が下る事だらうと思ふ。兎に角時間を浪費しない生活法なんだ。運動中か然らざれば研究中（机に向つての事ばかりでなく）と云ふのが僕の見た生活態である。學校を終えたら直ちに圓山か三角山に馳け付ける。之は夏でも冬でも、春でも勿論秋でも同じ事なんである。トレイニングと勝利が常に彼の肉体を馳り立ててるには違ひないのだが、それにしても全く科學的な練習法、研究法は源さんの几帳面さに依ると云ふても良いだらうと思ふ。

僕は夏水泳をやつてる關係から春、夏の練習は親しく見る機會はなかつたが、源さんの日記帳を見ると、何月何日温度×度、天候××。A——B何分何秒B——D何分何秒D——A何分何秒、本日のコンディションは如何であつたと云ふ事は一目瞭然と書いてある。夏は只冬の樣にスキーを足に付けて居ないと云ふ丈の變化でタイムも日記帳の書き方も別に大した變化もない。そして處々に紅いアンダーラインが新レコードを示してるのが見えてる。さふ云ふ日の記事は特に丁寧にそのコンディションが誌されてる。だから源さんの練習生活は冬ばかりであると思ふと大した異ひで、夏も冬も源さんにとつては同じ生活法をとつて進むで行つたと思へる。又彼の日記帳を見るとスキーをはいて生れてから何日目だと云ふ事がその日付の上に明かに書いてある。全く詳しいものである。云はゞ『努力の人』と云ふ字が良く當てはまる人だとつくづく思ふ日が良くある。源さんのスキー技に對するのは本當は天才（此の言葉は私の

嫌な言葉であるが假に此の字の意味を借りて）ではなくて努力なんだと云ひたい、でなければあれ丈の研究もあれ丈の速度も得られなかつたに相違ないから。勿論運動家で努力家でない人は恐らく居まい。然し僕が云はふとするのはその運動家中の努力家だと云ふ事である。彼が秀れた努力家だと云ふ事である。僕が最も敬意を表する點も亦此處に在る。

× × ×

源さんに欠點を探がして呉れと頼む者が僕に在るとしたなら僕は斷るより外はない。全体としての感じが落付いて圓滿で、健康である外は全く云ふ事がない。只落付き過ぎて時々聽衆をぢらす事がある。スキー部の歡迎會や送別會やその他の會合で源さんの處に話の番が來ると時計を出して「ホーラ又三十分掛るぞ」と陰口を聞く氣の早い者の居るのを時に見受ける。そうして大抵の場合、源さんの苦心談はスキーを初めて足に付けた日から今日迄の長談議で、初めての者や三回目位迄の者は大概面白く聞くのだが長い丈に、古い連中には大分退屈閉口の向きがあつた樣に覺えてゐる。一体源さんは話し好きであつた。どつかり尻を落ち付けて鳩が豆でも噛ぢる樣にボツリ〳〵と話し出したら却々面白い話を止めない。語尾が圓みを帶びて長く、語勢は常に同一で、又夫が却々チャーミングな何者かを有してゐる。外の運動と異つてスキー程話す事の多い運動も少い。夫を經驗の多い源さんが人一倍の話の種を持つてゐる事は不思議ではないが、その話し振りの悠長なためかチャーミングなためか兎に角汲めども汲めども盡きざる話の種を常に藏して居た。それが糸口を見出すと何時も出て來る。

友人のMからこふ云ふ話を聞いた事がある。何でも一月の或る土曜に手稻のヒュッテで活動寫眞を映しに來てゐた源さと一緒になつた。所がその夜ストーヴの周りで九時頃から源さんの話が始つたそうだ。Mもディスタンスをやる關係から一心に聞いた。話は樺太の廿五キロと今年の青山合宿で四人リレーと單獨對抗した時との比較談に終つて、もう彼是十二時近くであつたそうだ。が話のために興奮したらしい源さんは一度ベットに横つた後、枕頭にローソクを立てゝリュックサックからノートを出して勉强を初めたMは眠つたから跡の事は知らないが「源さんは心懸けが異ふからね……」と云ふてゐた。

×　　×　　×

斯ふ云ふ風に源さんの風格は俗流と一寸放れた所が在つたので、今でも「源さんらしいね」と云ふ言葉がスキー部の者に依つて云はれてゐる。何をするに付けても確かに此の「源さんらしさ」が躍如としてゐた。

山を一心に馳け廻つてゐる時、よくふとすると柔い源さんの唄を聞く事がある。そしてその多くは「押せや押せ押せ……」である。彼の最も愛好する雪上の歌は終に事實となつて本年の七月に實現した。喜び――誇り。それこそ幾何であつたらう。

×　　×　　×

私は最後に比類ない彼の熱情の記事で此の稿を終らうと思ふ。今年の送別會の夜の事、卒業生の答辭が廣田さんから始つて源さんの所へその番が來た。何時もの樣に永い感想を聞く事と思ふてゐると何うしたものかプロローグは案外早く終つて直ちに今年のシーズンの話に入つた。話はレコードに依つて見ると慥かに日本のレベルは世界の夫に肉迫して來た事を力說して、特に跡に殘し行く吾々後輩への話に轉じ樣としたとき、今迄晴れやかに輝り榮えた顏がガクリと下に落ちたかと思ふと「……の新進が、新進が」と二回同じ事を繰返して跡は言語に絕して泣き伏してしまつた。源さんが愛と感激の涙に嗚咽してゐ間僕達は只その熱情に打たれて瞳の裏が熱くなるのを覺えた。涙無しには別れられなかつた程、源さんの學校生活は淸く美しかつたのだ。

源さんが送別會の席上で流した涙が今になつて見れば日本スキー界との告別の涙になつたと思ふと、あの涙に益々私の血が興るのを覺える。

×　　×　　×

理論と實力との具有者たる源さんの死こそは現在日本スキー界の最大恨事でなければならない。

源さん生きてサム・モリツツに闘はしめば。嗚呼。

―十月三十日―

岡村の源さん

山口　壽一

健康なぞといふ事は誰も問題にしなかつた程頑强であつた彼が突然逝つた―而かもトツツカレさうもない病氣で。

昭和二年十月十六日こそは彼の偉靈に對して盛大なる葬ひの式が母校に於て北大スキー部主催のもとに行はれた日であつた。日本スキー史上に於ける特筆すべき日である。當日各方面の人々から披瀝された熱誠なる弔意は彼の生前の人格とスキー界に於ける業蹟の致す所である。

僕は今彼の追弔記を書くことになつたが、平素から筆不精の僕のことだから書かんとする事柄が前後錯雜して讀み難からん事を憂へる。

× × ×

逝くものは已に水の如しと謂ふ。彼の靈は天の何所に飛び去つたらうか。併し彼が此の世に殘したスキーに關する業蹟は實に大きかつた。僕は今彼のスキー界に於ける立場とか業蹟とかを書くことはやめる。只漫然と思ひ出の一端を書くに止める心算である。

中學時代と豫科時代の彼と僕

僕は彼と同じく札幌二中で同級生で通したが彼に就いては殆んど識らなかつた。どんな顏の人であつたかさへも知らない。只彼が喇叭手を務めて居つたので行軍や遠足の時に列の先頭に立つて、肥つた体を丈の割に大きな歩巾でテク〳〵と運んだことや、逆立ちに妙を得てた彼が一丈半もある梁木の上から逆立ちとなり地上に飛び下りたりしたこ

とが幻影の如く記憶に有る許りだ。彼が中學時代札幌間スキー驛傳競走に參加したことも淡く覺えて居る。あの頃はアルバイン式のスキーで走つた筈だ。

彼と識り合ひになつたのは豫科時代であつた。それは彼の家の畠のまはりに植ゑてあつたポプラの枝を貰ひに行つたのが動機であつた。そのときは「……の枝を少し下さい」「はい差し上げます」と言つた樣な切口上であつた。之が初めての彼との會話であつた。其の中已に僕は寡言で用意周到な男だなと思つたものだ。其以來併し別に親しく彼と交際はしなかつた。

本科時代以後の僕と彼

親しく往復し始めたのは本科時代からだ。僕は毎日學校から家に歸ると運動の爲めに町の西にある二〇〇米突許りの圓山に日參して居つたが、本科二年の春の或る日に彼を誘つたのが動機で、其以來は殆んど毎日彼と共に登つたものだ。多い時には一年間に二百回近くも登つた。彼も僕も日課的に且つ義務的に登つたものだ。春は殘雪が未だ登り途のあちこちに殘つてる頃から、夏は靜かに坐つて居てもぐてん〳〵になる樣な暑い頃でも、秋は初雪が來て寒い北風が吹き荒ぶ頃でも不相變二人はコツ〳〵と登つたものだ彼が心臟を强め肺を擴げ筋力を增す爲めには此の山は最も手頃で便利なものであつた——僕としても勿論である——彼の走り振りを紹介すると先づ麓で輕い体操をやり足慣らしをし、一分間の脈搏(プルス)を數へスタートする。ドン〳〵驅け上つて頂上に着くと即刻所要時間とプルスを測る。後には登るに要する時間を毎日一定として、頂上に到着した瞬間のプルスと並びに、到着後或る一定時間置きのプルスを毎日毎日プルスの數値の減つて行くのを觀たりした。殊に本年の春以來は熱心にプルスの減少仕方を注意し、或る日僕に「思ふ樣に數が減らなくて悲觀するぜ」と云つた事が有つたが練習上の事であんな事を僕に云つたのは初めてであつた。例の計測が濟むと思ひ出した樣に大聲で歌ふ——大抵元氣の良い民謠——のを常として居つた。又中々群がる鳥に石を投げて肩を痛めなどしたもので何時も愉快さうであつた。圓山ばかりでなく暇があれば札幌の西に連なる山々に登つたりなどした。彼は此の樣な練習を毎日細大洩らさず日記に書いて居つた。——彼の沒後彼の殘した書類の

整理をした時に知つた――それは仲々精密な物で距離、標高、天氣、道の善惡、所要のタイム、プルスの數、疲勞の大小、氣分の善惡、其の日の食物等を常に記入して置き中にはチャンと製本してあつたのもあつた。この樣に練習日記ばかりでなく平常生活の日記も詳しく書いてあつたし、山やスキーに關する原稿もよく筆マメに書いたものだ。殊に敬服するのは發信受信物は皆差出人又は受取人の名前、住所、手紙の大意をノートに控えてあつた。その用意周到さである。又彼の學校のノートは癖の無い字で恐ろしく解り易く筆記してあつたので、ノートの穴埋め借手が多く、しまひには一時に多くのノートの行衞が分らなくなる事があつた爲め、ノート貸與帳を作り、貸したノートの種類と借り人と、日附を記入しておいたりした。兎に角彼は恐ろしく筆マメな頭の整頓された男であつた。僕が彼の家を訪ねて行つても彼がペンを執つてない日は殆んど無かつた。話が脫線したが本年春以來彼の練習は白熱化した。一諸に圓山に登つても息が切れて苦しくその爲め自分でプルスを數へられないことも時々あつたが、その時は僕が數へたりした。僕は餘り登り方が迅速過ぎないかと云つた事も屢々あつたが彼は「プルスの平常數に復る時間が早いうちは大丈夫だ」と云つた。

彼の練習生活ばかりでなく日常の生活にも一年中を通じて享樂的分子が無かつた。万事「時間節約」と「体力助長」の二大方針で要領の良い有意義な生活をやつて居つた。彼の爲す事は必ず計畫的で有つた。例へば柄に無く中島や狸小路邊りを散步するが、之は只の散步ではない。必ず買物訪問、前日の練習の疲勞の恢復、氣分轉換等々と多くの用事を包含させて居つた。尤も彼の樣に學校生活以外に重大なる「練習」を爲すべく强ひられて居る者に取つては上記の樣な切りつめた生活は當然であらう。

冬になり白い物がボツ〳〵降り出すと彼の生活はめざましく緊張して來る。冬になつて一番早くスキーを引つ張り出して滑べる者は札幌では彼であると斷言してもよいだらう。雪の一寸も積れば早速朝早く――遲くなると雪が消えて了うから――圓山の芝生か北大の寮の前の芝生に出掛け三段滑走に熱中した者だ。こんな日に限つて彼は「雪がやつと降つて好いな」等と何時に無く喜びの態を表はしたりしたが其は當然の事である。何となれば九月末になつて多

少圓山も紅葉し初めると「後一月半でスキーが出來るさ」等とさも自信ありげに云ひ、躍進滑走の身振りなぞして愉快の餘り夢中で一町も先に走つて行つたりしたこともある位だから――僕は苦笑しながら後を追つたものだ。

彼のスキーに對する態度は最近二三年以來急激に眞面目と成つた。殊に度々云ふ樣だが、今年の冬以來は一層緊張して來た。一月から三月迄は卒業試驗期で時間とエネルギーの經濟の目的で次の樣な意味深長な生活樣式をとつた事もあつた。即ち、朝食前滑走―朝食―睡眠―勉强―晝食―睡眠―勉强―用達しの外出―滑走―夕食―睡眠―勉强―滑走（夜間なり）―睡眠（翌朝に至る迄）と言つた樣な方針であつた。

不斷から彼はよく居睡をして居つたものだが、矢張り盲目的のものでなく內心計畫を以てやつて居つたのだらう。

彼の兩親の言葉に依ると、彼は平素家庭內ではスキーの事で話をしたことは殆んど無く、大抵默々として居つたさうだ。レースの有つた日なぞ家人が心配して彼に成績を尋ねても「ナニ好い加減のものサ」位で濟ませ翌日の新聞の成績が出て居れば默つて新聞を家人の目前に差し出したりしたさうだ。家の人許りでなく一般の人に對してもさうであつた。之は矢張り彼の沈着謙遜な心の表はれであり、亦現在の狀態に滿足せず、目差すレベルの高かつた所爲と僕は考へる。今年の三月十六日單身札幌、小樽間のスキー走破をやつたが、其の日の日記を見ると、

「……寮のエルムの木の下より出發、六時、手稻山朝日に赤し。嬉し涙出る。ザラメの上をスキーは滑る……。快走快走……」

とあり、此の日彼は卓越せるレコードを作つた事は皆の知つてることであらうが、彼は其の日の夕方所用で我等友人數人と北海タイムス社に集まつた時、當日の成績をさも愉快さうに自分から披露したが、こんな事は僕にとつては初めてであつた。尙其の日の日記に「……羊羹一本を腹に抱き……」とあるが札樽間九里の道を只の羊羹一本の食糧で僅か三時間許りで突破したのである。羊羹で思ひ出したが彼は甘い物を好んだ。殊に運動後には「エネルギークエレだ!!」等と云ひながら有難さうに喰べたものだ。彼はあれだけの馬力を出して居つたが平素から食物は質素極まるもので、自分から享樂的態度で食品を選んだりした事は無い。

夏冬を問はず山を歩く時に、よく人々が爲る樣にチョコレートミルク、チーズ、乾葡萄等の樣な派手で贅澤――言葉が少し不穩當かも知れぬ――な食品を準備せず、只平生の麥飯と副食物で通した。飲料水も最少限度に攝る事に修養して居つた。例へばよく僕も一諸に藻岩に上つたが、頂上から下りて來て麓の井戸の在る所に來ると「井戸を見ると水が欲しくなるから見ない」と云つて横を見てスタ〳〵と通り去つた事があつた。

僕は彼と屢々一諸にスキーに行つた、が只の一度も彼から滿足な指導を受けたことがない。惜しいコーチャーだが自發的にも受働的にも何も敎へて呉れなかつた。僕が彼の前で或る技術をやつてから「これで良いのか」と尋ねると「ウン」と至極便りない返事をする。其所で僕の方から、「ウンでは解らない、何所か必ず缺點があるだらう、どこがわるいか」と切り込んで行けば「君が今やつて出來たんだからあれで良いのさ」と逃げる。こんなことが始終だ。で彼に或る日「一体君はなぜもつと詳しく敎へないのか」と言へば「技術なんて自分で都合良い樣に加減すればいゝんだ、何も別に規則が無いさ」と對へた。終ひには僕も彼に對するコツを覺えてスキーに關しては何も尋ねなかつた青山合宿の班長をした時も矢張り此の樣であつたさうだがスキー許りでなく平常でも仲々ハキ〳〵と明瞭な斷定的な答をする事は尠なかつた。之は彼の用意周到の爲めであつて亦責任ある立場に居るからである。

彼に接した人々が彼から得る印象はいづれも好ましきものであつたらう。實に彼は人により差別を設けなかつた。そして明るい氣分で、力强い調子で鷹揚に話をした。彼の生活は人々の羨むものであつたし、彼の底知れない健康さは人々の話題によく上つた。彼の意志の强い事も人々の大いに賞讃する所であつた。併し彼の業蹟も彼の平生の好ましかつた態度も、易々と形成されて來たのではない、實に大なる忍耐と苦心の致す所である事を、日記に依つて全く識つた。彼には或る重大なる人間的の心配と責任とが有つた。その内容は言ふ必要がない。要するに彼は以前から呑氣で暮して居つたのでは絶對にない。彼は人としての憂をチャンと味はひつゝ育つて來て居るのだ。そして年老ひた父の事も深く心配して居つた。彼は憂ひ氣な樣を今迄一度でも一般の者に表はす樣な薄志弱行な事はしなかつた。彼

の意志は益々強固に鍛練されて來た。あらゆる彼の有する美點は彼の修養の賜であらねばならぬ。彼がスキー道に精進したのもその原因の一部は必ずや精神修養の爲めであつた。決して淺はかなお坊チャン的な興味本位からではない。彼の本年の三月末の或る日の日記の一節には「……益々洗練せらるゝスキー生活に全生活の光を求めん……」と有るのをみても明かである。次に彼をしてスキーに精進せしめた第二の原因は彼のスキー界に於ける立場である。殊に近年はさうである。彼は北大のスキー部の重鎭として、又ランングランフのリーダーとしてのみでなく、最近は日本スキー界の先達者として何時の間にか重且つ大なる責任を帶びて居つた。彼がスキー界の爲にどの位日夜心を碎いたかと云ふ事は親しくして居つたスキー仲間でも完全には解るまい。彼か八月入院以來の病床日記を見ると「……責任重き身病む心配に不堪、嗚呼」と云つた樣な悲痛なる詞が所々に見出される。學校を卒業する頃と共に彼の僕の所謂人間的心配は益々強くなつた。彼はその精神的苦しみを最も信賴してた一、二の人にしか打ち明けなかつた。彼の病氣が長引いて來ると共に彼は益々全快の早からん事を願ひに願つた。彼には又心配が重なつた。即ちオリンピック出場の通知が來たからだ。彼の煩悶は益々大きくなつたが外面的には左程に見えなかつた。第三の彼をしてスキーに精進せしめた原因は興味と体力とである。レースに對する興味は以前から有つたのではない。之は寧ろ最近現はれたものである。体力の點は大いに注意す可き事でなければならぬ。彼は以前——小學時代——から優れた体力を持つて居つた事は疑ひないが、最近二三年間の彼の目覺ましき活動振りは前に斷片的に陳べた樣に根强い用意周到な科學的な練習から得た体力に因つてのみ爲されるものでは決してなく、彼の北大スキー部に對する責任感、後には日本スキー界に對する强き責任感と希望とによつて、意識的又は潛在意識に爲された体力の犧牲的使用に因るのである事を僕は斷言する。げに彼の日記を見ると惡き体のコンディションと闘ひつゝ練習に從事した事が分る。要するに語を換へて言へば彼は責任の爲めに尊き無理をして居つたのだ。彼は練習に際しては休息と云ふ事を重んじ彼もそれを實行して居つたが、その休息も彼には實は完全なる疲勞の恢復を與へて呉れなかつた樣に思ふ。周圍の環境による事だらう。併し彼は

その苦痛を殆んど人には告げなかつた。彼の堅い冷靜な意志は總てを自己の力で抑御し通して來た。其所に彼の面目が存するのである。病重くなり譫言を言ひ出す樣に成つてからのこと彼は「世間の人々が心を合せて事に當つてくれなくては困る」と言ふ意味の事や、万國オリンピックスキー大會に於て優秀なる成績を擧げたい、と言つた意味の言葉を發したさうだが――附添つてた彼の母の言葉によつて――之は意識的混濁のためと云ひ平常から獨り心に抱いて居つた大なる心配の表はれでなくてはならない。

彼は本科卒業後直ちに病理學教室に入つたが、之は比較的時間の都合のつき易い基礎醫學に籍を置いて來年のオリンピック出場の準備――日本スキー界の大勢から觀れば、彼の出場は早くから殆んど確定的のものと人々は考へて居つた――の爲めのホンの腰掛けだと考へた人も多かつた樣だが實はさうではなかつた。大正十五年十二月某日の日記には「病理學教室に助手をして有効な面白い實驗研究を希望する」と云ふ樣な事が誌るされてあつた。彼は仲々獨創的な整頓された頭腦を持つて居つたから、學術的研究に從事しても必ずや潑剌たる効果を擧げ得たに違ひない。彼は亦日記に「人類を病苦から救ふには、病氣を治療するのは愚である。須らく病氣に罹らぬ方法を選ばなくてはならぬ余は豫防醫學をやりたい。結核に對してはサナトリウムが良い云々」と言つた樣な事を書いておいたが、要するに醫學的にも非凡な貢獻を爲し得たであらう。

紙面は最早殘り少なく成つた。餘り書き續ける事は出來ぬ。彼の夭折は餘りに哀れであつた。カゲラウの如く消へ去つた。彼の日記には幾多の樂しき願望が書き連ねてあつたが、今は何一つとして滿たされて居らぬのを心底から同情する。彼がオリンピック出場を喜んで待つて居つた事は非常なものだ。大正十五年十二月の某日の日記にも「瑞西行きを熱望す」と書いてあつた。亦彼が病床に於て瑞西派遣に決したと其の筋から受けとつた時は、彼の最も樂しかつた瞬間に違ひなかつた――勿論外に表はれなかつたが――彼が病床で書いた書類を整理したら、瑞西遠征出發に際し買ひ求むべき物、例へば「服一着、しやつ、カメラ云々」とか訪問すべき町の名、例へば「伯林、倫敦、チューリッヒ、パリー、馬塞耳、云々」なぞと書いた紙片が現はれたが、皆此等は病床に於て洋行の愉快さを想像した餘り耐えきれ

なくなつて書いたものである。後になつて、病氣が長引き面白くないと自覺し初めた頃の日記には、絶望的な字が書いて有り、年老いた父を憂へ家の事を心配した極度に哀れな文字を見出す。讀む者哀愁の情に包まれぬものは無い。

併し日本のスキー、殊にダウエルラウフが斯程に迄長足の進歩した事は彼のせめてもの慰めである。彼の靈を安んずるには彼の後繼者達の努力が必要である。

彼のスキー姿は斯の「雪の樂園」や「シーハイル」や「大雪山實寫」等の映畫で偲ぶことが出來る。殊に「シーハイル」は、彼の日記にある樣に「學生時代のスキーに最後の花を飾つて滿足なり」と云はしめたものだし、大雪山の映畫は僕との最後のスキーばかりでなく、彼が初めて大雪山に登つた紀念であり、同時に彼の生活の最後のスキーフワーレンを撮してある思ひ出多き品である事を想へば感慨無量である。

最後に、彼が一九二七年度の最後のスキートレイニングを爲した四月十九日に、スキー練習控帳の卷尾に書き連ねてあつた言葉を紹介する。貴き体驗から得たる親切なる次の言葉は後人を裨益する事大であらう。

飽クマデ努ムルコトヲ友ヨ忘ルルナカレ。
今思フ、北大スキー部ノモットーハ研究、
ソノ研究ハ絶エズ考ヘルコトト比較ナリ。
殊ニディスタンスレースハ比較ヲ以テ第一
トスベキカ、スキーヲ比較セヨ Wachs ヲ
比較セヨ、Technik ヲ比較セヨ。
体力ヲ盡スニ當リテハ緊張ト休息ヲ忘ルル
ベカラズ。
若シ今年瑞西ニ行ク時ハ次ノ語ヲ友ヘノ賴
ミトシテ殘シ行カン。
考ヘヨ
比較セヨ
緊張ト休息ハ大切ナリ。（終リ）

（一九二七年十月卅日）

山と岡村君

山口健兒

生者必滅とは云ひながら金鎚で叩けば金鎚の方が缺けさうに思はれた岡村君に、こんなに早く不幸が來るとは誰しも考へなかつたことであらう。それだけに人々に多くの感慨を抱かせることは十分である。

その昔我々はよく先輩につれられて附近の丘陵へスキーを滑りに行つたとき、常に云はれたことばを思出す。

「あんな急な所を滑るのはゲン・ガン・バンのたぐひのやることだ。」

ゲンとは云ふ迄もなく岡村君のこと、ガンとは一昨年大學を卒業せられた阿部謹吾君のこと、バンとは伴素彦君のことゝ記憶する。長いスキーを持てあましてゐた當時の私には彖の仙人位に心に銘じたものである。

私が最初の年の春の合宿には私達のリーダーとしてその妙技を毎日見物し、ニセコアンヌプリ、チセヌプリへの登山には大分手數をかけて引曳り上げてもらつた思出も、當時最新旅行のドレースブルングを丁寧に教へられた思出も忘れがたいものだ。

とにかく何の技術にしても理論と實際は常に二個の拋物線の如く合はんとして合はざるものであるが岡村君とスキーの場合に於ては理論家であり實際家であつたのである。

この稀な才能は日本のスキー術をどれだけ向上させたかわからない。特に現在日本のスキーのディスタンスレースを岡村君なくして論ずるは天体の運行を引力を無視して論ずる樣なものであると云ふ位だ。

併し私はその樣な岡村君に就ては多くの人が語られるであらうから述べたくない。その昔靜かに山歩きに送られた岡村君に就て述べたい。しかし私とは大分時代もはなれてゐる岡村君のことである故、今や永久に豫科惠迪寮の記錄帳の中に封ぜられてしまふであらう。同君の登山記錄をこの追悼號に再錄して山々への憧憬に費された日の記念としたい。

×

大正十年九月十七日　（曇）

午後五時豊平發—六時十五分簾舞着—七時盤ノ澤野營地着—十時就寢

九月十八日　（晴）

午前四時半起床—七時十分出發—八時五分二股着—午前十時四十分札幌岳頂上着—十二時五十分頂上發—午後二時五十五分二股着—四時盤ノ澤着。

大正十一年　（豫科櫻星會旅行部幹事となる）

六月四日　（日）

午前七時札幌驛發—八時半錢函驛發—十一時十分峠の頂上着—雪解のため水量多く徒渉困難なり—午後六時半定山溪着—汽車にて歸札。

九月十六日　（土）

午後一時卅分石山驛下車雲なし—四時小屋着、澤やゝ水多し—九時半寢、風なし。

九月十七日　（日）

午前四時半出發—五時十五分第二ノ澤—六時四十分水源地—八時廿分尾根、見晴しよし。笹—八時五十分空沼岳主峯—九時三角點着—十二時四十分眞簾沼着、波靜、景色よし—午後二時四十分万計沼着—五時本流へ出る—七時四十五分の汽車に乘る。

九月廿三日　（土）

定山溪着二時十分—三時木挽澤にテントを張る—六時半着の後隊を迎へ八時全部天幕に會す。四時頃の雨全く止み星多し風微なり。十一時寢。

九月廿四日　（日）

午前六時四十分發—木挽澤と滝澤の間の澤を上る—七時半二股—八時半崖高き滝の左を上る。水全くなし直ちに尾根に出づ。笹割合に少し—十時半殆んど頂上に至る。暑し、晝食、樽前紋別より白井岳までの連山見ゆ。惠庭見えず、神威岳（モンバ）最も近し—十一時四十五分出發廿分にして頂上に至る。ブッシュひどく見晴し不良。樽なし—十二時十分下山—一時木挽澤上流●小滝極めて多く稍々困難の所二つ—三時廿分テント—四時四十分出發

五時廿分ホテル湯に入る—六時五十五分定山溪發—足が揃へば札幌より一日の行程として苦しからず。

大正十二年一月十四日

毛無山、遠藤山（スキー部計畫）

雪質惡しきため豪快なる直滑降にて無我の境に入るを得ざりしは殘念なりき。

二月十四日　札幌岳登山のため札幌發定山溪へ。

二月十五日　八時出發—札幌岳へ

天候惡く時間遲きため冷水澤を下りて定山溪へ出でホテルにて湯につかり一泊す。

二月十六日

八時出發、豫定を變更して烏帽子岳、三段山に赴く、淹澤と本挽澤との間の澤を登り一時廿分烏帽子へつき一時間を經て三段山へ登る。眺望絶佳にして恍惚として聲なし、紫雲たなびく彼方の大雪連山、雄然と人の世を超越せる余市岳等共は本當に山登る男の子の憧憬である。七時常次澤を出でゝ琴似に出た。

大正十二年

四月廿八日　眞駒內川上流小屋泊

四月廿九日　十一時空沼岳三角點着—漁岳まで日歸りせんとして時間たらず漁岳手前より引返し歸札。

大正十三年五月八日

午前九時三十九分札幌發—午後一時二十七分比羅布着、この日は山麓登山事務所泊。

五月九日　午前雨、午後より吹雪となる。滯在す。

五月十日　快晴、風强し。

午前七時半登山事務所發—三合目よりスキーを脱ぎ全く結氷せる急斜面にピッケルにて足場を作りつゝ頂上に向ふ—午後一時半九合目小舍着—小屋を掃除しストーヴを燃し小憩—午後三時蝦夷富士頂上三角點着、快晴なるため眺望よし、小屋前のスロープにてアイステクニックの練習をやる。この日昨日來の粉雪あり—午後十一時頃より小屋の外は吹雪となる。

五月十一日

午前十時小屋出發—午後一時登山事務所—三時八分比羅布發—夕刻歸札。

（以上惠迪寮旅行部記錄第一卷より抄錄）

×

大体以上の通りである。後年の岡村君にとつてはもはや大なる感激を以て嘗つては登られた手稻山も單なるスキー競技場位にしか考へられなかつたであらうが、常に山に登る者の氣持を心から解されて色々と話されたことを覺えてゐる。

であるからスキーのテクニツクやワツクスの研究の餘暇々々には或は「登山家の馴化に對する一考察」と云つた類の研究を公にせられたことは一再ではない。

私が最後に岡村君の山に於ける消息を聞いたのは丁度今年の夏私達の一行が北見から石狩岳へ登り、大雪山の黒岳小屋へたどりついたときに見なれたゾムメルスキーの二三臺を小屋の壁の外に見出したときであつた。

「七月の始めに岡村君等が來られて誰かゞ履くだらうとおいてゆかれたのです。」

小屋の留守をしてゐた番人のこの話が最後であつた。その後は私も東京に居り、その次に岡村君の話を聞いたときは病床の岡村君のことであつた。

今や幽明その界を異にせられ、往年の岡村君は思出の帳の彼方に入られたが、我々嘗て豫科の旅行部に關係あつた者にとつては旅行部の先輩としての岡村君の有形無形の功績は感謝してあまりあるものである。

こゝに拙劣なる一文を草し岡村君の靈に捧ぐ。

黒いネクタイ

相川正義

七月二十五六日だつたと思ふ。はつきりした日付は覺えて居ない。「明日八時の汽車か、遲れない樣にしなければいかんな」いつでもリユックサツクをかついで出掛け樣とする時の前日の考へが時々頭に浮んで居た。教室の二階の窓から向ひの解剖實習室のトタンの屋根越に夏らしい白い雲と、青い空が見えてる日だつた。と云ふ日の背後のドアに

ゆつくりしたノックがして、ふり顧つて見ると、思はず自分も微笑んで了つたのだが、それは紛れもなく、その明日を約束して居た源さんだつた。彼も笑つて應揚に私の机の所に近づいて來る。いつもの樣に—しかりいつもの樣に笑ひ乍ら—

「ヘルベティア・ヒュッテか、いゝ名前だな、どの位出來上つたらう」

私は彼の顏を見たら、すぐさう話しかけ樣とした。ヘルベティア・ヒュッテとはその時、盛んに工事中の奥手稻の針葉樹林中に造られつゝあるスキー・ヒュッテであつて、そこに明日二人で行かうと約束したのだつた。それが—

「明日はやめたよ。」

私が云ひ出す前に源さんは云ひ出したものである。

僕はおや〳〵と思つた。明日でなければ僕は當分は行けなくなつて了ふ。十日ばかり海岸に行こうと思つて居たからなのだ。

何故だい？　私は椅子から立ち上つて、やゝ性急に問ひかへしたが、源さんは相變らず笑つて居る。じれつたい事おびたゞしい。

少したつてから、これだものと云つて源さんは自分の手を額に持つて行く。風邪をひいたんだな、僕はすぐ察した成程源さんの額に手をふれて見たら少しボツ〳〵として熱つぽかつた。

「不景氣だな、今頃風邪をひいたりして—、しかし大事な身体だ。少しの事だつて、無理しない方がいゝな」

大事な身体だ事は私がさう云はなくても、彼自身がよく知つて居た。最も綿密な思考と、それに相應しい着實な努力を以て、來年のスイスで開かれるオリンピック大會に對するトレイニングを怠らない彼の日々であつたではないか。だから明日ヒュッテに行かないのも、彼の思慮から出たものだらうと思つて、やつと私は不意の中止に納得したのだつた。

それから暫く、大會派遣の事等について話し合つて「身体を大切にせいよ」でお互ひその日は別れたのだつた。

私は氣輕にさう別れの時に云へたのだ。その時の熱が、彼を死に到らしめた病の兆だとは如何して私が知ることがあつたらう。

今思へばその日が限りなくも懷かしい。その日迄續いて

來た健康な彼との連がりが懷かしい。その日が健康な彼と僕が別れた最後の日なのだつた。

最後の日――さう私はこゝできつぱりと書く事を得た。然もさう書き乍ら、愚かな私は非常に異樣な感に打たれざるを得ない。ほんとうに彼が私達の周圍から居なくなつたのか？　彼が死んだのか？　死、死、死？

私は彼がゆつくり出て行つたドアを顧るのだ。彼が又ノシ〳〵とやつて來ないだらうかと思ひつゝ。おゝ私も又物の本に書いてあつたと同じ事を云ふ。

そして强ひて私は自分の考へを、その後一週間後彼の入院から十月十五日迄の短い間に向け樣とする。

八月のある日――旅から歸つて來て彼がチブスの疑ひで大學病院に入院した事をきいて早速見舞ひに行く。二三日前に入院したと云つてた。

「寢てる時は色々考へさせられるが、まあ何にも考へない事にしてゆつくり寢てるさ。」

「いや、考へる事は皆考へつちまつたよ。」

私はそれを聞いて安心して歸つた。未だ彼の渡歐には日がある。

八月の末――彼がレントゲンを撮つたと聞いた。シャツテンがある。私達醫者には決していゝ言葉ではない。

九月のある日、晝休みに彼を見舞つた歸り、山口と中庭で會つた。源さんを見舞ひに行くと云ふ。

「いけないな」話しはそれだけだつた。

九月の末――頭痛が始つて來た。意識昏濁も時々ある。

默つて行つて默つて歸る樣になつた。レントゲンをとつたと聞いた時の暗い豫感がもうその日頃では、動かす事の出來ない絕望の事實に變じつゝあつた。

そして遂に十月十五日の寒い秋の日である。

朝教室に出るや否や彼がその曉方五時に息を引きとつた事を私は聞かなければならなかつた。

私はその一ヶ月彼の死に對しては充分用意はして居た筈だつた。既にあの病では再起は出來ないのを知つて居た。それだのに何を彼の死のために心構へして居たのだらう。

白布に横はれる彼を見ても、尙言葉をかけられる樣に思へて仕方がなかつた。何故僕が話しかけんとするのに彼は動かないで横はれるのか。

その日暮れて行く頃、皆と共に私も彼を火葬場まで送つ

た。かの赤さびた扉がガシリとしまるのをはつきり見た。しかも自分の心はます〳〵暗い不分明な、愚かな疑惑にとり圍まれて行つたのだ。「彼が病で死ぬとは？」

火葬場からの歸りの自動車から降りたら、寒い〳〵雨が降つて居た。少しは氣がはつきりするかと、又是非顏出しゝなければならないある展覽會に寄つて見たが、華やかなものを見ても何も心に映つて來ない。反つて一つの空ろな魂が、黑い大波の中にゆすぶられてる樣な心持にさせられてつらくなつて居た。

その夜可成り遲く、明日の彼の葬式のために、雨上りの泥の中を重たい心と足をひきづゝて、黑いネクタイを買ひに行かなければならないのに氣付いた。

背廣にかはつてから僅か半年、黑いネクタイ等考へた事がなかつた。まして彼の爲に必要になつたとは、どう信じてよいのだつたか。

彼との學生々活、長い彼との樂しいスキー生活。

それは何も書く事を得なかつた。それに源さんの事も恐らく何も書かなかつた。誰か書くだらう。

彼の愛稱（ニックネーム）をネコと云つた。ネコが居るからにはと、ひどい奴が僕をネヅミと呼んだ。

猫が居なくなつたら鼠は——僕は今心の中に溝に捨てられたあわれな鼠を感じて居るのだ。

—一九二七・一〇—

源さん

坂本直行

源さんが死んだ。

私にはあまりに信じ切れない事實だつた。あまりにも悲しい事實だつた。中學の時から私に山を敎へてくれた人だつた。山ばかりではない。スキーも青山の合宿でコーチを受けた事もある。

なぜもつと長く生きてゐてくれなかつたらう。腰の曲るまで、そして腰の曲つた源さんが「俺の若い時分にはな、アルパインをはいて一本の杖で滑つたものだつた」といふのを見たかつた、聞きたかつた。

私は今思ひ出の二三を綴つて源さんをしのばうと思ふ。

私が中學の時だつた。白井岳に誘はれて行つた。定山溪へ越える錢函の峠は其の頃まだ刈わけもなくずいぶんひどい道だつた。峠の上でブッシュの中に腰を下ろして青い眞夏の日本海を見下してひるめしを食ふた。其時、足をぞろ〳〵とはひ揚るだにの群を眺めて、

「オッホッホ……ゐるね」つてめしをいつぱいに頰張つてながめてゐた。この時のキャンプは生れて初めてのキャンプだつた。この時キャンプなるものが如何に樂しいものであるかを知つた。山に馴れない私には流れの音が耳について淋しくて寢られなかつた。然し厚く四角な張り切つた源さんの胸が、落ついた呼吸をしてゐるのを見て安心してねた。根曲竹があまりに猛烈だつたので頂上の三角點を見ながらもあきらめてしまつた。この時源さんの熊の樣に根曲をわける姿がまだ目に見える樣だ。「オッホッホ……ひど

ヘルベチヤヒユツテ　　齋藤丈彦

いね、冬のほるからいゝさ」と事もなげにいふたのをまだはつきりと記憶してゐる。源さんはスキーの名手であり、又ブッシュわけの名手でもあつた。

かへりには狸小路で今川燒で腹をふくらませて歸つた。それから定山溪の歸りにはいつも狸小路の今川燒は缺かした事が無かつた。

其後は度々山へつれて行かれた。

私が中學を出る春だつた。其の頃源さんは北大スキー部で大いに活躍してゐた。

奥手稻へ誘はれて源さんと平塚のカニさんと三人してうらゝかな春の光を浴びて、馬糞だらけの雪解の馬橇道を錢函の峠までスキーをかついで登つた。其の時私はアルバインのガチャ〳〵をはき、源さんは高田土產の山善式（？）スキーとかいふアルバインを少しもぢつた樣なスキーをはいてゐた。中山峠であそんだ兵糧の餘りであるといふ平塚さんの濕つたビスケットをかぢりながら、春の硬雪の上に腰を下して雪解の石狩平原をながめた。

雪にみがゝれたえぞ松は黑々としてゐた。ねこ柳の枝には春の光をあびてピカ〳〵輝くビラウドの樣な可愛い猫がいつぱいに咲いてゐた。「源さんあれはなんだらう」私はねこ柳を指さした。「うんあれかい、柳さォッホッホ……」柳の上にねこといふ字をつけなかつた源さんは、猫といふニックネームを持つてゐたから。

造材小屋で熊の肉をたらふく御馳走に成つた。それで奥手稻はふいに成つてしまつた。

源さんは小學校も中學校も私の先輩だつた。頭のいゝ源さんはいつも組長をやつてゐた。私が尋常四年の時だつたと思ふ。其頃からもう眼鏡をかけてゐた源さんは、今とはちつとも變らぬ聲を張揚げて棒を飲んだ樣な不動の姿勢で號令をかけてゐたのを記憶してゐる。中學の時、雪戰會に源さんが高い梁木の上で逆立をやつたのもおぼえてゐる。又金棒の名手でもあつた。あの重々しい体が輕々と廻轉する樣を感心してみてゐたものだつた。

又源さんは勇ましいラッパの名手でもあつた。二中のラッパ卒を引いて晝の休みに校庭に源さんのラッパの音が響かない日はなかつた。其特徵ある響はまだ私の耳に殘つてゐる。この頃からもうラッパに於ても凄いねばりを持つてゐた。行軍の時最後まで音の疲れないのは源さんのラッパ

だけだつた。

かうして思ひ出をたどれば數限りもない。

どつしりと落ちついた内に針の樣な鋭敏な觀察眼を以てシステイマティックに物事をかたづけて行く源さんだつたあの丸い大きな頭の中には鋭い智腦が動いてゐたのだ。

病院の窓から幾度かシュプールを印したであらう、西の山々をながめて、白いベッドの上であこがれのサンモリッツで粉雪をかける夢をみつゝこの世を去つた事だらう。やがては晴れの冬が訪れるであらう。この時に淋しくこの世を去らねばならぬ源さんの無念も思ひ餘る事に違ひない。

眞白な石狩平原の彼方に夕張芦別の連山が夕やけに赤くもえる頃、よく身輕な姿で瀧の澤のスロープを滑つて行つた源さんの姿も永遠に見られなくなつてしまつた。そして其のシュプールも今春を最後に消えて行つてしまつた。

だが源さんが築いたクロスカンツリーの土臺は、日本のスキー界の發達と共に永久に殘つて行く事だらう。

キャンプファイヤーをかこんで「オッホッホ……」といふ山人らしい强味のある笑ひをよくきいた。だが源さんの口は永遠に固く閉ざしてしまつたのだ。

この春私がこちらへ來る時は元氣な顏をして見送つてくれたのだつたが、其れが最後になつてしまつた。私は其後筆不精して一度も便りをしないでしまつた事を今後悔してゐる。

遠く離れて葬儀にも列する事の出來ぬ私は唯深い悲しみのうちにこのつたない思ひ出をつゞつて、源さんの靈に捧げたいと思ふ。

寫眞說明

ヘルベチヤヒュッテ。

白井岳の東北麓。小樽内川(オタネガハ)の清流にのぞんで建てられたスイス式ヒュッテで、南は鬱蒼たるタンネの森に、北は稀に見る美しい白樺に圍まれてゐる。此れはあの自然美にめぐまれたスイスを故郷とする北大豫科のグラー先生と建築家ヒンデル氏が建てゝ、北大に寄附されたものである。

サン・モーリッツへ行く友に！

木　原　生

瑞西サンモーリツツに開催せらるゝ千九百二十八年の第二回國際冬期オリンピツク大會は近づきました。その大會に出場せらるゝ選手諸君には、色々の準備もあり、定めし忙しいことゝ推察致します。

我々はスキーをはいて—即ちスキーが輸入されて—十六年になりました。正に一人前になるべき年齢に達したのであります。我々が過去十六年の間競技に對して學んだ事は殆どすべてが獨學でありました。從つて今度のオリンピツク大會に參加することは獨學者の力を試めす絶好の機會なのであります。この意味に於いて、我々の學び得たものは如何なる程度にあるか、又如何なる道を踏んで來たかを知ることが出來る機會なのであります。でありますから諸君が彼の地に行つて出來るだけ多くを見、出來るだけ多くの体驗を得らるゝ事を切に希望するのであります。諸君の今回の位置は、あたかも千九百二十年アントワープの水泳競技に出場した齋藤及び内田の兩選手と同じであらうと思はれます。即ち兩選手の學び得た知識が次回パリーのオリンピツクに於いて我が水上選手があの國際的地位をかち得た原因であつた樣に、諸君の今回の擧もかく有意義ならんことを切望し、諸君の自重を希ふ次第であります。

スポートマンは最もよき國民的の外交官であります。そしてその一擧一動は國を代表するものであります。國と國との親交、相互の文化の了解などもスポートマンよりなされゝば、難かしい問題ではありますまい。國威を鐵砲、大砲、軍艦等で發揚するのは莫迦げた話です。一發の大砲を打つことを節しても諸君の如き無名のすぐれた外交官を送る事の多いのを我々は曉望します。此の意味に於いても諸君の使命は大なるものであります。

然しその任は重く且つ辛いけれども、あの美しいサンモーリツツを圍む山々とそしてそこに集まる諸外國のスキー家との團欒とは、諸君を喜ばせるに充分であると信じます。

諸君の壯途に幸あれ。

スキー年鑑發行

全日本スキー聯盟

私共のスキー聯盟も創立せられ此處に三年の齡を重ぬることになりました。年鑑を出したい希望は加盟團体の方方の創立以來抱いて居られたものでありました。愈々今春の代表委員會に刊行することが決議せられて兎に角此處に出來しました。内容は次の通りであります。此處に一應御紹介申します。

◆我が國スキー界の將來をトし併せて派遣選手諸君を送る　全日本スキー聯盟會長　男爵　稲田昌植
◆歐洲スキー界見聞記　京都帝大教授　木原均
◆第一回全日本選手大會回顧錄　黒崎三市
◆日本スキー選手權大會の思ひ出　中川新
◆過去のスキー大會出場より得たる經驗　伴素彦
◆全日本スキー選手權競技の變遷とその反響の一端を伺ふ　廣田戸七郎　稲田昌植　西郷隆興
◆瑞西便り
◆各地方に於けるスキースポーツの發達について
信越地方　高橋翠郊
東北地方　吉岡龍太郎
北海道地方　廣田戸七郎　中野誠一
◆此の機をかりて
◆國際オリムピックスキー競技への首途に當つて　高橋昂
◆歐洲へ派遣せらるゝ事に就ての所感　伴素彦
◆國際大會へ派遣せらるゝこと　廣田戸七郎
◆全日本スキー聯盟設立について　小川勝次
◆國際競技大會拔萃
◆國際スキー選手故岡村源太郎君の死を悼む
附錄
◆國際スキー競技規定
◆全日本スキー聯盟競技規定
◆全日本スキー聯盟加盟團体

寫眞版、圖版入り
菊版假製綴、百頁、上紙質
頒布實價五十錢、送料六錢

發行所及申込所
東京市京橋區宗十郎町大日本体育協會內
全日本スキー聯盟

近代的シャンツエの構造

木原　均

本篇は筆者が諸種のスキーに關する圖書及び雜誌類よりシャンツエに就いての文獻を捜獵し、且つ自らの貧しい觀察を以つて書き綴つたものである。幸にしてシャンツエを建造せらるゝ諸氏の參考ともなれば筆者の滿足は此の上もない。

近代的シャンツエと名づく可きものはタムス（(Thallin Thams）の出現によつてゞある。つまりタムスがその前かゞみの姿勢をとつたジャムプの型を見せてからである。タムスは飛行の理論を述べて居らない。然し彼の飛行は所謂氣体力學に合ふと云ふ。（一九二六年スイススキー年報ストラウマン氏論文參照）彼はその點でスキー競技界に一つのエポックを作つたのである。

ストラウマン氏は力說する。「舊式のジャンプは落下（Tiefsprung を斯く譯す）である。少しも空中滑走をして居らない」「近代のジャンプは滑空（Gleitflug）であらねばならぬ」と。氏の說く所は最も近代的シャンツエの條件を指摘して居る。

同氏に依れば近代的ジャンプのアウトラインは次の通りである。（主として「山とスキー」第六十九號に掲載せられたる青木信三氏抄譯に依る。）

アプローチ

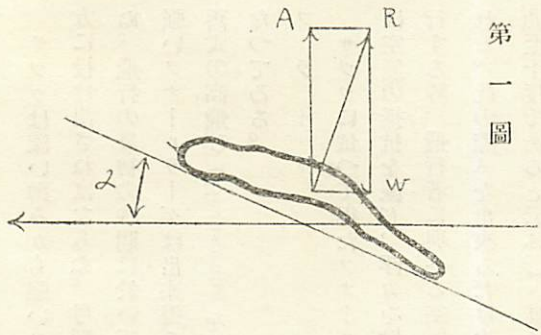
ジャンパーは深く蹲んで腰を下し、出來るだけ小さくスキーの上に腰をかゞめる。重さは強く後方に全足を平にうつす。そして空氣の抵抗面を最小にする。

サッツ

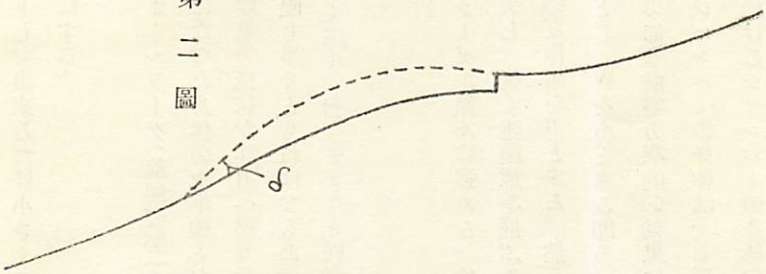
サッツは深い蹲みから強いフォールラーゲ(前傾姿勢)に身体を素早くうつすことである。身体の重量は可及的早く前方に投げ出さねばならぬ。弓型になつた身体の水平線となす角度は、シャンツェを放たれた直後は十度を越えてはならぬ。飛行の最初の時期に於いて空氣の抵抗が浮力へ移り行くのは降下角度の小さいために最も激烈にあらはれる。故に強いフォールラーゲは出來得る限り早くとらねばならぬ。此の如きジャンプはきれいなゆつたりとしたものであつて、舊式の高飛び(Hochsprung を斯く譯す。Tiefsprung と同意義)の如く強い空氣の抵抗に逆らつた落付かない飛行とは異なつてゐる。

フライト

サッツに依つて得たフォールラーゲを徐々に強める。特に飛行角度が下向きになるに從つて屈身の度を強める。然らば空氣の抵抗を減じ、浮力を增大し、低く遠距離を飛ぶことが出來る。(註一。第一圖の如く矢の方向にVの速度で飛行する時、飛行者に與へる空氣の反作用をRとする。然らばRは、浮力Aと飛行運動に反對に作用する抵抗Wと分解される。此の際Aを出來るだけ大とし、Wを小とする即ち $\frac{A}{W}$ を極大とすればよいわけである。その時の角度αは四度乃至十度であると云ふ。) 斯くの如き航空力學的の効果は、遠距離飛行即ちスピートの速い飛行(二一—二四秒米の速度)に於て現はれる。此の際にジャンパーの身体は少し屈した方がその効果を亦大ならしむる條件である。こゝで吾々は飛行機の翼の横斷面と空中に於けるジャンパーの身体のプロフィルとの相似を指摘したい。(二十二秒米の速度は一時間八十キロ即五十哩の速さである。之れ以上の速さは出せないと考へて居る人もある。)



第一圖



第二圖

着陸

以上のやうな飛行を行へば、着陸角度δ（第二圖）が小となり、從つてその時にうけるジャンパーのショック $V^2 \sin\delta$ は小となる。（註二。$V^2 \sin\delta$ は降下角度δの小なる程小で、その時の速度V（秒米）の大なる程大である。此の $V^2 \sin\delta$ の値はストラウマン氏の計算に依ると百五十以上であるとジャンパーは立てない。そんな強いショックは耐えられないのである。例へば角度が二十度、Vが二十一、四秒米なる時は $V^2 \sin\delta = 156$ であるから立てない）

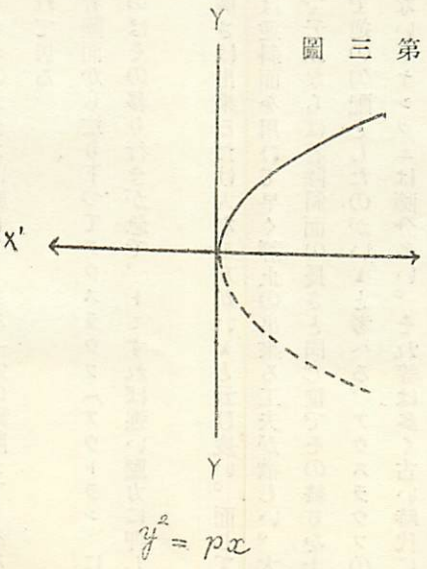
以上に述べた理論は、單にタムスの型を見て急に出來上つた事でないことは無論である。その理論に到達するには色々の經緯があつたのである。例へば、強いフォールラーゲは、一九二二年カールセンが諾威から來て中歐にその技を見せた時大きなセンセーションを與へた。彼の姿勢はその當時直立して居た。此の型をボンナ型又はカールセン型と呼ぶ。此の強いフォールラーゲを與へた飛行が氣体力學的に這入つた第一歩である。（カールセンもその後稍屈身した姿勢をとるに至つた。）

その次には新記錄の國アメリカの驚ろくべき報道がスキー界を賑はしその視聽を集めた。その報導とはマンマット・シャンツエ（Mammut-Schanze）で七十米突のジャンプが行はれたと云ふ事である。（山とスキー第十二號郡場博士記事參照）此のシャンツエの構造が從來のと異なつた點は二つある。

（一）踏切り臺（Schanzentisch）が強く下向きである。即ち傾斜が強くて十度に近い。之は從前の五度乃至六度に比して傾きが強いと云はねばならぬ。

（二）着陸面がパラボラの形をして居る。之は出來るだけ飛行距離を增大するに役立つ。（第三圖に於てパラボラの一部分を示し、近代シャンツエの着陸面のカーヴとの比較に便ならしめた。）

第三圖



ジャンプ飛行は元來空氣の抵抗に防げられて形の變化するパラボラである。若しも前傾姿勢が強ければ空氣の抵抗が弱く從つてパラボラの形が伸長した形となる。此の時には飛行距離が增大されて居る。更に又踏切り直後のジャンパーの速度が大なれば大なる程ジャンパーの畫くパラボラは平たくなり、從つて遠くに飛ぶ事が出來る。（パラボラの式を $y^2=px$ とすれば、pの値の小さい時に平たい曲線となり、大なる時に曲線は急激な傾斜をとる。飛行線が全くのパラボラであるか否かはこゝには述べがたい。）

飛行距離を增大する因子は外にもあるが（例へばジャンパーの重さに對する加速度、飛行線に對するスキーの角度、即ちスキーの方が浮力を增大するに役立つのではあるまいかと云ふ疑問もある。等）以上に擧げた二つの事項は近代的シャ

ンツエが飛行距離に著しい進歩を與へた原因である。

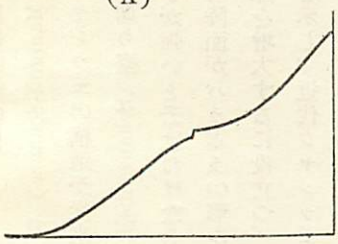
第一の條件は前傾姿勢を強くするのに便利を與へ、その爲めに空氣の抵抗を少なくして飛行を長距離となす事が可能である。而して長距離の飛行では着陸時に大なる衝動をうけるが、第二の條件に依つて立ち易い。力を要せずして不倒ジャンプを完成出來る。と云ふのは、パラボラ型のシャンツエでは遠い距離ほど着陸面が急になつて居る。之が落下の角度を小ならしめ衝動を減ずる。「遠い程」と云つてもそのジャンピング・ヒルの大きさに應じて、ある一定の距離までゞある事は斷り書きする迄もない。着陸面の傾斜角は最大限度四十度とされて居る。

前述のやうに設計されたシャンツエでは非常に速力が速いから着陸面から辷り下つてアウスラウフ（アウトラン）に移る時の接續斜面は除々であらねばならぬ。クニックが強いと云ふのはその移り行きが急で、トモすれば強い壓力に押しつぶされるやうな場合を云ふのである。

アウスラウフの廣さについて一言するならば、アウスラウフの廣さは出來るだけ大なる方がいゝと云ひ度い。而してその終りは逆斜面を用ひて早く靜止の出來る工夫が欲しい。大凡の見當で云ふならば着陸斜面の長さと同じ位でその終りを十五度位まで逆の勾配としたのがいゝと考へる。アウスラウフの充分廣くないシャンツエは隨分多い。それ等は多く古い時代に建造されたものである。以上の說明で近代的シャンツエの特徵を述べたつもりであるが尙念のため二三の例をあげ、新舊の對照して見たいと思ふ。

第四圖Aはクロスタースのセルフランガシャンツエのプロフイルで之が如何に高飛び式であるか從つて如何に強いショック

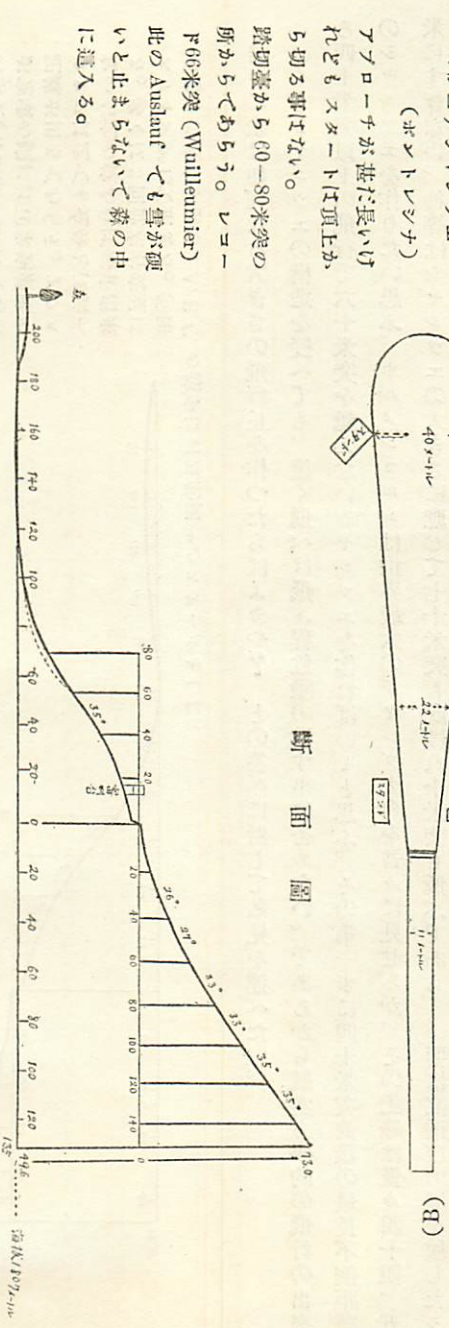
第四圖
(A)



セルフランガシャンツエ
（クロスタース）

〔說明〕 滑降面は長さ71米ある急傾斜面（42°）で、踏切臺は五度の下向。着陸面は長さ70米で最大傾斜面 35° その曲線をCと比較せられたし。圖外は廣いがゆるやかな下り傾斜面、而して十五米ばかりの不充分なる逆斜面あり。

を着陸の時にうけるかは想像にかたくない。Bは改造前のベルニナ・シャンツエ(實線)であるが改造箇所を點線で示してある。丁度此の部分が古いシャンツエ改造に當つて常になされるやうである。グリンデルワルドのメッテルベルグシャン

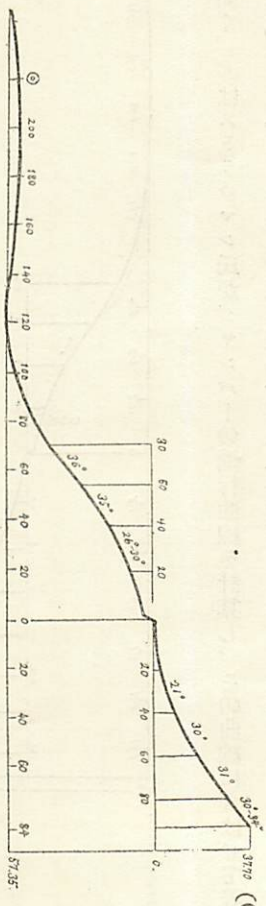


ツエも斯くの如き改造をしたと聞く。Cはストラウマン氏がジャンバーの飛行曲線を計算し、その曲線に合はせて着陸面を算出したと云ふサン・モーリッツのオリンピアシャンツエである。一九二八年の萬國スキー大會は此のシャンツエで行はれる事になつて居る。此のシャンツエだけが以上三つの中アウスラウフが比較的廣くとれて居る。アウスラウフは競技會當日の雪の狀態で廣くなくとも足りる事もあらうが若し土地の許す所では充分にすべきと思ふ。有終の美をなさしめるべ

く最後の顚倒をジャンパーにさせたくない。プロフィルだけでは少し物足らぬと思つてベルニナシャンツエの平面圖も第四圖Bにそへて置く、之で幅さも略分る事と思ふ。

オリンピア・シャンツエ
（サン・モーリツツ）

説明　從來の最長不倒距離は61米突(Wuilleumier)であるが完成の曉には70米突前後の記錄が出るであらう。アウスラウフは之でも充分とは云へないが之の位あれば靜止出來る。多くは3回位左右交互にスウイングして止まる。◎印の邊りに觀衆が居る。A. B. C. の諸少は可及的同一のスケールとした。



終りに余は如何なる大きさの飛行丘を作つたらばよきや？　との答へに對して私見を述べたい。

いくらシャンツエの構造を變へても、遠く飛べば飛ぶ程危險の增す事は否めない。であるから航空力學的の飛行の出來る四十米突以上の飛行で六十米突を越えないシャンツエを作ればいゝと思ふ。その第一歩に四十米突前後の最長不倒距離のシャンツエを作りたい思ふ。ホルメンコルンは世界最大のジャンプ大會を吾々に見せるが、その記錄は僅々四十四、五米にすぎない。彼等はシャンツエの大きさに應じて七十米突も或は八十米突も飛ぶであらう。要は高飛びの域を脫したシャンツエを作るにある。此の點でサツポロ。シャンツエの改造がまたれる。

附記。ジャンプについては廣田戸七郎君著ジャンピングを讀んで得た點が多い。同君のジャンピングに對してなした貢献に敬意を表して筆を擱く。（九月廿二日）

氷と雪の理學的性質について

加納一郎

1

水の、沸騰點は攝氏の一〇〇度で、その融解點（氷點）は〇度である——いや正確には、氣壓七六〇m·m·のもとで、純粹の水の沸騰する溫度を一〇〇度と定め、同じく結氷する溫度を〇度とし、その間を一〇〇に分けて、溫度の尺度としたもので、ウプサラのセルジウスの提唱したものなのである。とは云ふものゝ、それでは水は常に攝氏一〇〇度で沸騰するか、また寒溫計が〇度を示せば全ての水が凍結するかと云ふに決してさうではない。それは氣壓の强弱にも關係してゐるし、溫度變化の速度にも相關的である。結氷の際の膨張系數は、結晶形は、硬度は如何、或は雪の密度や、分類などについて、吾人の知つて置かねばならないことは限りなくある。今日の科學はなほこれらの問題のうちで、雪の成因や氷の電氣的性質等のごとく十分なる解答を與へてゐないものもあるけれども、次に既に科學者が明かにした所の、氷と雪の理學的性質の二、三について記して見よう。幸に讀者が之によつて多少とも、此の天惠の美の觀賞に、科學的素養をとり入れることが出來たならば結構である。以下の說明は主としてタットン（A. E. Tutton, Member of the Alpine Club.）の新著に依り、我國の最近の報告を之に補足したものである。

2

氣壓が減減すれば水の沸騰點もまた低下するのは、物理學の初歩の教ふるところである。即ち氣壓は七二〇粍のとき攝氏九八・五度で沸騰する。氣壓は海面上の高度を增すとともに減少するものであるから、從つて高山地で煮沸が早く出來ることは、山岳家のしばしば經驗するところで、これ上記の理由にもとづくのである。

結氷點もまた氣壓によつて左右され、マッソンの實驗によれば數千氣壓を添加することにより、氷の融解點を、−18°C まで低下せしめた。ゼームス・トムソンは一氣壓を增すごとに、水の結氷點を攝氏〇・〇〇七五度だけ低めることを示した。氣壓の沸騰點に關する方は、環境の如何によつて吾人に關係するところが大であるが、その氷點に關する影響は前者に比すれば甚だ輕微であつて、僅かに實驗的裝置によつて知るのみである。

しかし氷點について吾人の知識を、も少し正確にして置きたい。一体水は攝氏〇度でいつも氷となるものであると考へるのは謬見である。氷點とは畢竟、水が固化する最高の温度を意味するものである。從つて標準氣壓の下に於いても、多くの物質はなほその氷點以下の温度で液体狀を保つてゐることがある。それは何にも妨げられずに靜置せられて、その物質の固形分子の增大する傾向を抑制されてゐたり、結晶の胚種となり易き目に見えぬ細塵の空中よりの落下を防いだりすることによつて容易に達し得られる。

ヘンリー・ミーアは、二十年ばかり前に次の如き實驗を試みた。密閉したチューブに水を入れて、攝氏の+9°から−2°まで、冷却器を用ひて温度を低め、かくすること六八回にして、全ての水は−2°から−16°までの間に於いて結氷し、その平均は −1.9°C であつた。氷片等を含有せない純粹の水が結氷するのは、普通この位の温度であることを知る。ファーレンハイトも亦同樣な實驗をした。そして氷點よりずつと低温で存在する水に對して衝擊を與へると直ちに結氷することを明かにした。デューフォールは一八六三年、或る種の混合液体に水滴を浮遊せしめて、氷點下二〇度まで液狀に保つた。これらの實例によつて、水はその氷點以下相當の低温にまで結氷せずに存在せしむることが出來る。その爲には密閉せる管中に靜置するか、空氣との接觸をたつて、他の液体中に浮遊せしむる等の方法をとるべきことを證せられた。

3

ジユールとブレイフエアーとによつて、水は攝氏四度のとき（正確には三・九四五度）に最大の密度を有するもの即ち換言すれば、容積に於いて最小を占むるものと立證せられた。而してこの温度に於ける純粹の水は　種々の點で理學上の單位となる重要さをもつことは、こゝに記すまでもないであらふ。次に四度を中心として、その比重と容積の變化を表示して置く。

温度	密度	容積
〇	〇・九九九八七	一、〇〇〇一二七
一	〇・九九九九三	一、〇〇〇〇七〇
二	〇・九九九九七	一、〇〇〇〇三〇
三	〇・九九九九九	一、〇〇〇〇〇七
四	一・〇〇〇〇〇	一、〇〇〇〇〇〇
五	〇・九九九九九	一、〇〇〇〇〇八
六	〇・九九九九七	一、〇〇〇〇三二
七	〇・九九九九三	一、〇〇〇〇六九
八	〇・九九九八八	一、〇〇〇一二二

〇度に於ける氷の密度は一九一〇年、氷の理學的性質に關する權威、バーンスによつて定められた。それは四度の水を標準として、〇・九一六九である。之を容積の方から見ると一、〇九〇六となり、〇度の水が　一、〇〇〇一二七なるに比して約九％の增加である。この容積の變化も既によく知らるるところであつて、その膨張力のすさまじいものであることも、多數の例證を擧げることが出來る。水道管が罅裂したり、水甕が割れたりするのは寒地でよく見るものである。その如何に强力なるかを示す一例を擧げればウイリアムスと云ふ人がカナダのクエベックで試みたところによると、十二吋の深さの鐵製容器に水を滿し、その口に木栓を堅く槌で打込みたるものを攝氏氷點下二八度の外氣中に露出すると、間もなく木栓は百ヤード以上も押しとばされて、口から氷柱が八吋もとび出したと云ふことである。かくの如く、水が結氷に際して膨張する顯著なる性質は自然界に於いて、樣々な偉大なる營力として働いてゐる一面には土壤の分子を細く破碎して農業上に利點を齎し、他面に於いては內容物の凍結によつて植物細胞を破壞し、樹幹を凍裂せしむる等の被害を與へる。山岳に親しむものにとつて最も密接な關係のあるのは、岩石の割目に於いて雨水などの結氷することである。その爲に岩石は細片に割

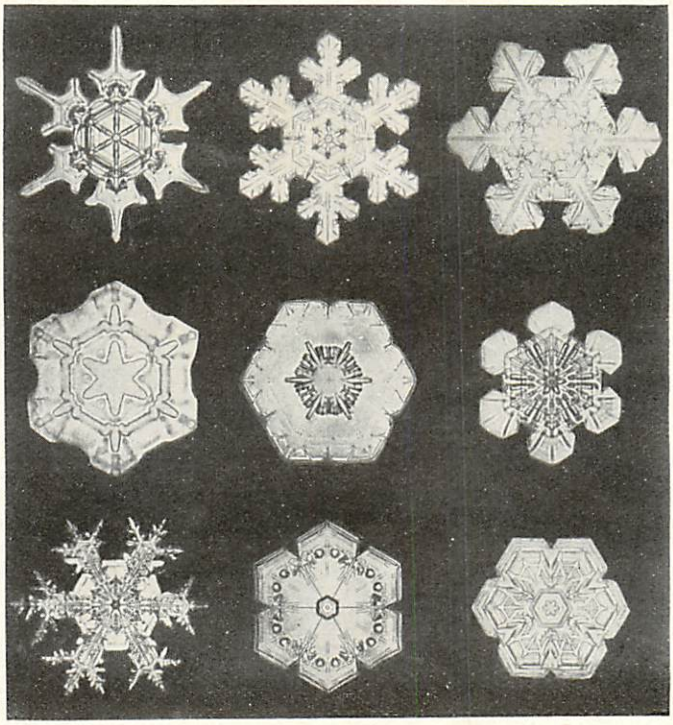
裂し、日中その融解によつて岩片の落下を來さしめる。この營力は氷の山岳削磨作用として重要なものである。

容積の變化についで、密度の減少を問題にして見る。浴槽に於いて吾々が、時に体驗することはその上層が既に適温にまで熱せられてゐるのに、底部が尙低温であると云ふ事實である。水が熱せられゝば膨張して輕くなり、上昇して來て、冷たいものが下層を占むる樣になるのは當然である。從つて試驗管に目高か何か小魚を入れて、その水の上部を加熱して沸騰せしめても、底の方は水のまゝであるから魚は活動をつゞけてゐると云ふ奇術も、この理で說明が出來る。然し注意すべきことは、この關係は攝氏四度以上の場合に限られてゐるものであつて、四度以下になると反對の關係があらはれる。水が四度以下に冷却せらるれば密度を減じて上昇して表面を占め、下層には之より温かい水が位置することゝなる。かくして段々冷却して行くと先づ最初に上層の輕い部分が、零度に達し、結氷し、更に急激に密度を減ずる。氷層は水と外界とを遮斷して、熱の傳導を著しく妨げるから、氷層の發達は加速度的に遲くなる。即ち池や湖沼の水が底まで結氷してしまふ如き氣候は餘程の寒さでなければならない。多くの場合、大氣温度が氷點より相當低下してゐても、池沼の内部は結氷せずに、魚族やその他の生物は安全に生棲をつゞけてゐるのである。自然はこの酷寒のうちにも、かくの如き慈悲心をあらはしてゐる。

次に冬季窓ガラスによく見る美しいフロストについて觀察して見よう。この美麗な羽毛のごとき、また完全に生育した羊齒植物に相似なる結晶は、室内に於ける温かい水蒸氣が窓ガラスにふれて、外氣の寒冷のために、冷却され、沈澱するものであるが、之の現象に關する要素が二つある一つは結氷の遲速であり、他は水蒸氣の量である。水蒸氣の量が完全なる結晶形を成すほど十分でない時、また結晶が急激に起る場合に、かくの如き樹木型を形成するものであると云はれる。而してこの種の結晶は鹽化アンモニア等の濃厚溶液によつても作らるることが知られてゐる。

4

雪は大氣中の水蒸氣が結晶したものであることは記すまでもない。しかしその成因については氣象學の方で定說と



雪華の寫眞は尠なくないが、ベントレーの撮つたものが最も代表的である。彼が37年間の研究によつて提供された幾多の寫眞は雪と關係深きものにとつて此上なき貴重な資料である。一見同樣な粉雪もその滑度に於いて大なる相違のあることを經驗する吾人は、この雪片の研究によつて疑問を解決せらるゝのではないかと思ふ。

（10～50倍）

なつてゐるものはまだない。タットンの記載するところは次の如くである。即ちそれはをそらく、高層の靜かにして寒冷なる空氣が、瓦斯狀の H_2O の分子を直接、雪片の核となさしめ、それが空氣中を降下するにつれて、漸次その分子を增加して、特有なる對稱的結晶のシステムに發達するに到るものである。かくて形成せられた六方形狀の雪片は地上に達し、または吾人の黑き外套の袖に落ちる。しかし或る場合に、これらの雪片は細粒狀の氷を被つてゐるか又は全く粒狀をなしてゐることがある。こう云ふ粒狀のものは、一般に雲を形成してゐる水滴が直接、結晶したものである。即ちこゝに於いて吾人が一口に水蒸氣と呼ぶものにも二種類あることを認めなければならないのであつてそれはまた實に明かに首肯出來るであらう。一つは完全なる瓦斯体をなせるもので、眼に見えないが、他は多少とも細微なる水滴をなし、その集合は雲の如き白色として眼にうつる。スティームパイプから勢よく排出せられる蒸氣をよく觀察すると、排出口の直ぐそばでは、外見上殆んど蒸氣の存在を認められない部分がある。そこから若干の距離を於いて、水蒸氣は白色の湯氣をなす。即ち排出された直後はなほ全き瓦斯狀にあるが、外の空氣に接して冷却せられ、水滴を形成するときに初めて、可見的存在となる。之が普通云はるるところの水蒸氣で、霧とか、層雲とか云ふものは全て後者から成り立つてゐる。

雲の事が出たついでに、書き記すが、あのデリケートな白い細片をなしてゐる卷雲は、水滴の集合ではなく、多くは六角柱狀の氷晶からなり立つてゐる。また薄絹のヴェールの樣に大空を蓋ふ卷層雲はやはり氷片の集合である。と云ふのはこれらの高層雲が、月や太陽を蓋ふて、その光線を屈折するときに生ずるハローは、中層雲が生ずるコロナとその視角を異にしてゐる。それは前者は氷の爲になされ後者は水滴のために屈折する故に相違を來すものだと說明せられる。

これによつても解る通りに、非常に低溫や大氣中の高層に於いて生じた雪片や、高層雲は常に柱狀又は板狀結晶をなすものであつて、之に對し、さほどでもない天候により生じたもの、又は下層の雲は、多種多樣な羽毛狀の雪片をなしてゐる。

雪の結晶の種類については、甚だ興味ある問題である。

前世紀末、雪の研究大家たるヘルマンは、之を分つて板狀柱狀に二大別し、前者を更に、星狀、片狀及びその混合、後者を角錐、角柱及びその混合との六種とした。最近アメリカのベントレーの發表した結晶の寫眞は、四二〇〇種の異れる形狀を含むと云はれる。しかしそれらの全てが、Hexagonal symmetry なることは一致してゐる。最も多きは六放射の星狀で、各放射軸の角度、羽毛狀分岐の角度は六〇度をなし、放射軸の間にはレースウォークが施されてある。かくのごとき星狀雪片の最も完全なる大なるものは、空氣が靜穩で、氣温が適度に低い場合に出來る。アメリカやカナダの著しき低温地や、アルプスの如き高山地ではこの星狀結晶の他に、柱狀及び板狀結晶が生ずることが多い

かくの如き雪の結晶の種類は、次の五種となるものと云はるる。(一)星狀、(二)星狀にして密なる核心を有するもの。(三)板狀、(四)柱狀、六角柱、(五)粒狀。

六角錐狀をなすものは見ることが出來ないが、(四)の兩端が變化して生ずることがある。

5

氷と雪の熱傳導率、これは理學的性質の最も重要なるものの一つであつて、今日迄度々、實驗の對稱となされた。一八九七年ストラネヲの驗出した結果は、氷についてその結晶軸の方向には〇・〇〇五〇〇、結晶軸に直角なる種々の方向には〇・〇〇五一四となつてゐる。一八八五年アンドリウスは氷と雪の傳導率を比較し、氷は雪の一二二%に當るものとした。一八八九年エルストロームは各種の温度に於ける雪の熱傳導率を調べて、〇・〇〇〇五〇七なる値を出した。その時の雪の密度は〇・一八三であつた。

一八九一年アベルスは熱傳導率は雪の密度の平方に比例することを發見し次の常數を出した。

$$0.00677\,d^2 \qquad (d:\text{密度})$$

一九〇一年ヤンソンは雪の結晶と大きさによつて大なる相違があることを指摘したが、一般的に供用し得べき平均値として次の式を算定した。

$$K = 0.00005 + 0.0019d + 0.006d^4$$

K：熱傳導率　　d：雪の密度

これによつて知るごとく雪はエボナイトに次ぐ熱の不良導体であつて、氷の方は雪の十倍もの能力をもつてゐるが

鐵の二十分の一にも及ばない。

一体雪の密度に關しては之を實驗の對稱とした人は内外に甚だ多い。一般に積雪の密度即ち比重は

$$\frac{\text{降水量 (m.m.)}}{\text{積雪深 (c.m.)}} = d.$$

によつて知り得ると云はれてゐる。勿論この降水量中には雨や霙が含まれてゐてはいけないし、兩者が同時に測定せられたものでなければならない。これによつて或る地方の或る日の雪の密度を判定し得るわけであるが、密度は時間とゝもに著しく增加するもので、たとひ外界の事情、即ち氣溫や風力が同一狀態にあつても、自重のために增すものである。

之を根室に於ける松川哲美君の實驗に見れば、降雪一時間毎に測れるものは平均 ○·○六二、四時間毎に測れるものは ○·一一二、八時間毎に觀測せるものは ○·一一五であつて、時間の經過と共に如何に密度が增加するかを示してゐる。高田に於ける測定も亦、同樣の傾向を表し、四時間毎の測定では ○·一一六、八時間毎では ○·一四六の平均値を與へてゐる。概して寒地に於ける雪の密度は降雪直後に於いては、○·○五乃至○·○八位であるが、既に四、五時間を經過すれば○·一以上になるものと思つて間違はなからう。たゞ注意すべきことはスキー家はこの密度の大小をもつて、雪質の良否を判定するインディケーターの如く考へ易いけれども、同一の密度を有するものでも降雪直後よりの變化の模樣によりその雪質は異り、また先にも記した雪の結晶の種類の如何にも依ることである。

積雪の密度に關しては、雪層の深さとの關係について實驗式を出した人もあるし、またその季節的變遷についても多くの數字が上げられてゐるけれどもこゝには略することゝする。二、三書き漏した點もあるが、以上に於いて大体氷と雪の理學的性質を明かにした。しかしこれらの種々の性質について、一應の知識は與へられたにしても、尙神秘な自然の、纖細な變化については、まだ吾人の究め盡さないものが多々ある。

吾人は聖心を象徵する純白の雪、冷徹そのものゝ如き氷の碧の誘惑を享けるとゝもに、それらの美しきものゝうちより、われら人類のために貴き珠玉を探り出さねばならないと思ふ。

—一九二七·九·一六—

樺太東海岸突岨山の植物

平塚直秀
岩垂悟
永井政次
荒木斯郎

今夏我々四名は年來の希望だつた樺太旅行特に植物採集並びに寄生菌類調査のため樺太東海岸を目的に出掛けたのであつた。東海岸を撰んだのは出發に先ち宮部博士に樺太産植物に就いての大体の樣子をお伺ひした所海流の影響により西海岸に比し東海岸産植物の興味深きことを知り得たからである。早速相談の結果東海岸登帆附近の山々へ登ることに定めた。七月十三日大泊上陸後、大泊、落合、榮濱小田寒、東白浦、等を經て、十八日東白浦から汽船で登帆に到着し此處を根據として約十日間、附近の山岳及び海岸岩壁上の植物や之れに寄生せる菌類の採集に從事した。此處では特に部落の南に聳立する突岨山産の植物に興味を持ち再度登攀を試みて多數珍奇なる植物又は寄生菌類を得たので、特に突岨山産植物の概略に就いて述べる事にした。

標高五六三米（陸地測量部明治四十年測圖假製樺太南部五十五万分の一「北登帆」に據る）の突岨山は登帆より南一里餘に聳える死火山である、東は海岸にせまりて斷崖をなし、北はヌプリボ山に連りて山脈の南峯を形成し、西は軍道姥毛内方面に一体の裾を引いてゐる。元來「トツソ」なるアイヌ語は山のせまるの意で、その突骨たる姿は近海航路航海者の目標となつてるそうである。

樺太植物の調査はフリードリッヒ、シュミッド氏の採集旅行以來多くの學者に依つてなされたが登帆に寄港採集せるは明治卅九年九月十八日に三宅勉氏が始めとなすものゝ如く同氏は附近ヌプリボ山に採集せられたるものゝ樣である。突岨山植物の初めて採集せられたるは僅か數年前同地方二三の有志に依りて爲されたるのみで未だ嘗つて、專門家の調査されたるを聞かないのである。然し顯花植物分類學及び生態學等にまつたく門外漢たる我々の不充分なる觀察のもとになされたる調査に學術的記述を求むるは酷ならんも我々の眼を通じて觀察せるまゝを記して植物殊に高山植物愛好家の參考にもならば我々の深く幸ひとする所である。

突岨山の植物に就いて

先づ本山の植物景觀を次ぎの樣に五大別して觀察して見た。

イ、山麓針葉樹林。
ロ、溪流に沿へる植物景觀。
ハ、上位濶葉樹林。
ニ、ハヒマツ帶。
ホ、山頂附近に於ける植物景觀。

イ、山麓針葉樹林。　山麓一帶は針葉樹林である。樹種は殆ど全部がトドマツで　處々にエゾマツ、ナヽカマド、シウリザクラ、エゾノダケカンバ、ドロノキ等を混生するも其の量は極めて少ない。樹林下の灌木としてはイチ井が頗る多く、其他、ヲガラバナ、ニハトコ、サルナシ、エゾイチゴ、ツルツゲ、トガスグリ等で稀にチシマザサを見る下草としては、ミヽカウモリ、オホヲタカラカウ、カウゾリナ、ハンゴンサウ、ミヤマタニタデ、ヒメミヤマスミレ、ヲナガヤブニンジン、ウスバサイシン、エゾノヨツバムグラ、キツリフネ、ダイコンサウ、アキカラマツ、ヒメイチゲ、コミヤマカタバミ、ヒメムヤウラン、クロユリ、マヒヅルサウ、ツバメオモト、オホアマドコロ、クルマバツクバネサウ、ホソバトウゲシバ、トクサ等。蔓性植物としては、ツルアヂサ井多く、倒木上にはエゾデンダ等の着生したのを見受けた。

ロ、溪流に沿へる植物景觀。　水源を山頂附近に發する溪流の多くは東斜面にむかつて海に注ぐ。溪流に沿ひ山頂を目指して溯りつゝ其の植物景觀に注意すれば大略次ぎの

様である。一度溪谷に降れば、針葉樹種は全く其影を斷ち濶葉樹が此れに代る。即ち、ミヤマハンノキが最も多く、所々に密林を形成し、樹林下には、ウコンウツギ、トガスグリ、ヲガラバナ、矮性のイチ井等の灌木を見る。更に溪流に沿ふて自生せる草木を列擧すれば、アキノキリンサウ、ミヽカウモリ、エゾヨモギ、ウラゲヨブスマサウ、タカラカウ、フキ、キツリフネ、キバナノコマノツメ、エゾノリウキンクワ、ツルネコノメ、チシマイハブキ、モミヂカラマツ、サラシナシヤウマ、タニギヤウ、ミヤマアカバナ、ウスバサイシン、サクラサウモドキ、サンカエフ、ハクセンナヅナ、ミツバキリンサウ、オニシモツケ、エゾフスマウラジロタデ、マヒヅルサウ、クルマユリ、トクサ、其他數種の禾本科及び莎草科植物である。特に所々に見受ける溪流の岩石上にはエゾイハデンダ、エゾウスユキサウ、ダイモンヂサウ等を産す。

ハ、上位濶葉樹林。　山麓針葉樹林上部一帶はエゾノダケカンバの純林で、更に上部に位するハヒマツ帶との中間帶をなして居る。樹林下の灌木としては、イチ井、エゾクロウスゴ、チシマイソツヽジ、コケモヽ、エゾマルバシモツケ、ツルツゲ等で、其他チシマザサの密生せる個所も處々に點在して居る。更にハヒマツが上部から降下して來て孤生して居るのも見受けた。下草としては、ミヽカウモリ、アキノキリンサウ、タカラカウ、リンネサウ、コガネイチゴ、ミヤマハンシヤウヅル、ウスバサイシン、チシマニンジン、ヒメイチゲ、ノビネチドリ、ミヤマモチヅリ、バイケイサウ、マヒヅルサウ、ホソバタウゲバ、ミヤマワラビ等で、リンネサウの如き非常に多量に産し、實に奇麗である。

ニ、ハヒマツ帶。　エゾノダケカンバ林の上部はハヒマツ帶である。ハヒマツ帶にはハヒマツの外、ミヤマハンノキ、ミヤマナヽカマドの矮性のもの、エゾクロウスゴ、エゾツヽジ、ホソバイソツヽジ、チシマイソツヽジ、コケモヽ、キバナシヤクナゲ、ガンカウラン等の灌木混生し、更にコガネイチゴ、ゴゼンタチバナ、ヒメイチゲ、マヒヅルサウ、アキノキリンサウ、ウスバサイシン、ミツバワウレン、リンネサウ等を産す。

ホ、山頂附近に於ける植物景觀。　ハヒマツ帶を拔けて更に登れば山稜に出る。此附近一帶は所謂お花畑で頂上に

到る間頗る珍奇な種類に富んで居る。山稜には所々に岩石が露出し西北斜面は特に廣大なお花畑である。更に山稜の東方に突出するところに小峯があるが其の東南面は一大岩壁であつて多くの珍種を藏して居る。

A　西北斜面の草本群落。大体に於てチシマイソツヽジ、ホソバイソツヽジ、キバナシヤクナゲ、クロマメノキ、クマコケモヽ、コケモヽ、エゾツヽジ、エゾマルバシモツケ、ガンカウラン等の小灌木で密に蓋はれて居る。稀れに矮性のミヤマハンノキ、ミヤマナヽカマド、エゾノダケカンバ又はハヒマツ等が混生して居るが其量は多くない。此等の小灌木の間又は點在せる岩石上等には美麗な植物多く其内には珍奇なものも多數ある。試みに其等の種類を列擧すれば、ヌブリボアザミ、エゾノアヅマギク、アキノキリンサウ、キバナカハラマツバ、イハウメ、チングルマ、チシマギキヤウ、チヤウノスケサウ、エゾツヽジ、チシマニンジン、ウメバチサウ、チシマゲンゲ、ツマトリサウ、ゴゼンタチバナ、エゾノゴゼンタチバナ、タカネオミナヘシ、キバナシホガマ、カラフトセンクワサウ、リンネサウ、レブンサイゴ、ヒメイチゲ、シコタンサウ、ミヤマハンシヤウヅル、ウスベニタウチサウ、キンラウバイ、ヌブリホツメクサ、オクエゾナヅナ、ムカゴトラノヲ、カラフトシユロサウ、チシマゼキシヤウ、オニク、マヒヅルサウ、オニクリシリカニツリ等である。

此處で注目に値するは岩石上にヌブリボツメクサ、レブンサイゴ、チシマゼキシヤウ、チシマギキヤウ、チシマゲンゲ等が頗る多量に產する事である。私共の登山した際は此等の植物の開花期であつたが、實に北海道の高山に於ても稀な程の美麗な景觀である。

B　三角標に到る山稜岩石上の植物。此處に產する植物の種類は比較的少ないが、花の美麗なものを含むと共に其の量の頗る多い事に一驚した。例へば、ヌブリボアザミ、エゾウスユキサウ、ヌブリホタンポヽ、エゾノアヅマギク、エゾツヽジ、コケモヽ、イハヒゲ、クマコケモヽ、ガンカウラン、イハウメ、チシマギキヤウ、レブンサイゴ、キバナカハラマツバ、ヒメヒヤクリカウ、チシマゲンゲ、コマガタケアケボノサウ、ヌブリボツメクサ、オクエゾナヅナ、チシマニンジン、シコタンサウ、チシマアマナ、チシマゼキシヤウ、チシマラツキヤウ、ムカゴトラノオ等で、特にイ

ハウメ、コマガタケアケボノサウ、イハヒゲ、ムカゴトラノヲ、チシマアマナ等は岩蔭の濕潤な個所に多く見出し、此れに反して、ヌプリボツメクサ、ヌプリボアザミ、ヌプリボタンボヽ、シコタンサウ、レブンサイゴ、チシマギキヤウ等は陽あたりのよい岩石上に頗る美麗に開花せり。

C　東南面岩壁及び其附近の植物。本山中に於て最も多くの種類を含み且、其内には他の個所に於ては見出されないものもある。岩壁上には、エゾウスユキサウ、ヌプリボタンボヽ、タカネオミナヘシ、キバナノカハラマツバ、ヒメヒヤクリカウ、シコタンサウ、ヌプリボツメクサ、レブンサイゴ、チシマギキヤウ、チシマゲンゲ、エゾツヽジ、クマコケモヽ、リシリカニツリ等を産し、其内でも白色のシコタンサウ、ヌプリボツメクサ、黄色のタカネオミナヘシ等は非常に美麗に岩壁を飾つて居る。岩壁の基部には、ハヒマツ、ハヒビヤクシンや其他エゾクロウスゴ、コケモモ、キバナシャクナゲ、チヤウノスケサウ、エゾマルバシモツケ等の灌木を産するの外、主な草本としては、オホタカラカウ、エゾノアヅマギク、アキノキリンサウ、ミヤマオグルマ、チシマアサギリサウ、キンバイサウ、チシマニンジン、オホカサモチ、カラフトセンクワサウ、ヒメイチゲ、ミヤマオダマキ、ウメバチサウ、カマヤリサウ、カラフトビランヂ、シホガマギク、キクバクワガタ、ゴゼンタチバナ、コガネイチゴ、チシマフウロ、キバナノカハラマツバ、ウスベニタウチサウ、イハオトギリ、ウメバチサウヒロハクサフヂ、チシマゲンゲ、マヒヅルサウ、カラフトシユロサウ、チシマラツキヤウ、エゾカンザウ、キミカゲサウ、カハラナデシコ、カウバウ、ミヤマカウバウ等で、ミヤマオグルマ、カマヤリサウ、チシマアサギリサウ、キクバクワガタ、キミカゲサウ、カラフトビランヂ等は本山中、他所に於ては發見する事が出來なかつた種類である。

D　山頂三角標附近の植物。山頂附近は岩石のみである從つて植物も自ら前記の東南面の岩壁上に生ずるものと大差なく、ヌプリボツメクサ、オクエゾナヅナ、チシマゲンゲ、シコタンサウ、エゾウスユキサウ、ヌプリボアザミ、レブンサイゴ、ムカゴトラノヲ、キンロウバイ等を産し、殊に三角標下の崖にはヌプリボツメクサとシコタンサウを多量に産す。

以上私共が同地方滯在中、眼に映じた儘をノートして來たものに依つて記述して見たのである。

落合から敷香に到る樺太鐵道株式會社經營の鐵道は目下敷設中で遠からず開通されるさうだが、此れを利用するときは比較的容易に落合から此の突岨山に行ける樣になる。然し鐵道は突岨山の海岸線を通らず、背面の軍用道路（此の地方では軍道と呼んで居る）に沿ふのであるから登山はむしろ姥毛内（驛遞）からする方が便利かと思ふ。但し此の方面からの登山道や踏分け等は今のところ無論ないが高い山でないから案外樂に山頂に達せられるだらうと考へられる。

附記。此度の採集旅行中、岩垂、永井、荒木の諸君は、殆んど毎日顯花植物の採集及び整理に晝夜兼行で努力を拂はれたのである。若しも私達の此度の採集品特に突岨山の採集品が幾分たりとも、學界のためになるとしたならば其れは全く同君等の努力の賜である事を附言して置く（平塚生）

赤岳ノルドグラート紀行

D B H 生

高瀨川の奥、湯保と水保の二つの流れに分つ山稜がある怪奇な姿をして居る割合に餘り人の注意を引かない。標高は二千五百米を上下する三粁に近いナイフエッヂがある。北鎌尾根の二千九百米の獨標に立つた者はこの山稜に「恐るべき」の語を冠する程惡く見える。赤く燒けた山膚は鋭い山稜と相待つて山人の心をとらえる。

或る夏の終りであつた一人の男が夢遊病者の樣に硫黄澤越に出かけた、彼は何氣無しに偃松を漕いで鋭い山稜の見える處まで行つた。彼はそこに意外な發見をした。赤岳迄の縱走が意外に簡單な事を知つた。然し山稜には雪が殘つて居なかつた、水の用意の無い彼は思ひを山稜に殘して山を去つた。

年は過ぎ、やがて夏は來た。

神河内の谷へと入つたが毎日々々雨は降り續いた。梓川は赤く濁つて流れ溫泉にも這入れ無い日もあつた。

八日程の間冷い水の中を膝まで沒して五千尺まで行つた、久し振りに雨が晴れたのでSが穗高を越えて先發する。槍に着いた翌日Bが登つて來た、又々天氣は惡くなり殺生の小舍で三四日過ごした。

十五日の朝天氣は今日も惡いと高をくくつて居ると段々晴れそうになるので支度そこ〳〵出掛ける。

リュックは十二三瓩程だからばかに足が速い。肩に登ると赤岳のノルドグラートが霧の晴間に見える。

西鎌を下るとき飛彈の寒い風が吹き上げる。硫黄澤の越に着いたのは槍の肩を出て一時間の後であつた。

ローテを成可くグラートに取りたいから多少時間もかゝるが偃松と山榛木の鍛を行く、峯を二つ程越えると所々に美しい花畑や小池が偃松を綴つて居る、偃松を下り切ると風化の進んだアレッがあるサンドロックが多くて一歩毎に崩れる、所々にケルンを積んで行く、三十分程で北穗高形の峯に出會ふ。頂きには凄いシュタインマンがある。第二の峯は十分程で行かれる。第三第四の峯も大体尾通りに歩いて簡單に赤岳まで來る。今までのリッヂは北鎌の樣に尾根が廣いから非常に樂だつた。

晝飯を喰べる。こゝからの槍は實に立派だ、硫黄澤も覗けば白い煙が見える。赤から北東北の方向には硫黄まで怪奇な形想をしたトロームとナイフエッヂの連續である。

赤岳からリッヂに就いて下つて行つたがギャップの二百米程上で止むを得ず千丈澤側をトラバースする。サンドロックが多い、又小さなギャリーを下つてザッテルまで傾斜の多い岩面をトラバースする。

其の次のトロームは非常に南面が惡いので硫黄側を卷いたこのトラバースは四五十米だが一寸凄い。この第一トロームの北側の根下に行きアンザイレンする、こゝから頂きま

では五十米程だがなか〳〵悪い千丈澤側を十米程トラバースして十五米程のアンカーの充分あるバトレスを登る。リッヂに出ると小さな岩片が落ちて來る。頂きの十米程下に岩が非常にゆるんだチムニー狀の所がある僅か四五米程の高さだが一つ間違へば大石を抱いて落ちねばならん。登つてホットする。頂きにケルンを積んで二人は何んとなく嬉れしくなつた。是からあこがれた岩登りが始まるのだつた然し私達の先途には數多の悪いトロームが横たわつて居る再び元の場所に引き返すのに落石が煙を立てゝ落ちて行く再びリュックを脊負つて第二のトロームに行く、リッヂの千丈澤側を登つてギッフエルに達す。簡單で十分程で達す第三のトロームは一流に悪い、千丈澤側も硫黄澤側も悪いリッヂは五米程の立て岩で閉ざされて居るロックの根下を硫黄澤の側をトラバースして立岩の上に段々登る。それからは凄いスラブだ。右手の方に六七糎の幅のクラックが殆んど頂きまでつゞいて居るそこ以外には登れそうもない。傾斜は七十度以上もある股のフリクションを利用して登る、下でジッフエルして居たBが二十米のザイルをすつかり延ばしてしまつてもヒッチに二三米未だある、ザイルを脱ずして登る途中Sの頭上から一抱もある岩が落ちて肩をかすめて落下し破片がBの頭を傷けた。Bは大丈夫かと下からどなつた。Sは幸に手がクラックの中に充分入つて居たのでからうじて落下を逃れた。

頂きに立つて二人は無事を祝し合つた。然しすつかり疲れて來てアクビが出る樣になつた時計は四時二十分だ。今夜は何處に宿るべきか吾々のテルモスの湯は殘り少くない。水の得られる所に宿ることにして第三のトロームを下る。下りは大して悪くない。それでも次のドーム狀の峯のザッテルまで十分程かゝつた。こゝでザイルを解く。ドームは偃松が着いた千丈澤側を登つた。高さは百米程だが非常なアルバイトだ。頂きに着いてテルモスのお湯を飲んで元氣を着ける。それから硫黄澤側のギャリーを三十米程下つてトラバースしながらザッテルに着いた。時計は六時近くを示して居る。千丈側に百米程下つた所に雪が見える怖ろしい悪い谷の頭である、Bが先に下る。岩壁に偃松の少し着いた上に二人が座ることの出來る程の所がある。寢返りを打てば脚下數百米の懸崖に落下する。ザイルでジッフエリングして寢る。其夜の夕飯は焚火こそ無いが明日

のアルバイトのため素的なものだつた。夜は暮れて行く。暗黒な北鎌尾根は二人の山人を嚇げます樣に思はれた。冷い風が千丈澤から吹き上げる。岩頭の一夜は明けた。

コッフエルの熱い紅茶で朝飯を喰べてリッヂに再び出た。朝風がさつと硫黄の臭を持つて來る。硫黄澤側をトラバースして第四峯に攀ぢる上部には二つの峯がある。ケルンを積んで次のピークのザッテルに下る途中二三米の殆んどバーチカルなバトレスを下る。第五峯は第四峯と殆んど同じ位の高さであるがこれを登つて下るよりリュックをザッテルにおいて置いて登つてこの峯を硫黄澤側を卷くのが有利に思はれるからザッテルにリュックをおいて登つた。頂きは尖つて居り頂きに立つことが出來ない。ケルンを積んで下る。第五峰を卷いて第六峰の硫黄澤側のガレを偃松に着いて二百米程登る。頂きは二つに分れて居る。そこらあたりにシャモニーの足跡がある。少し休んで下る。下りの千丈側は偃松、硫黄澤側は風化したガラとロックだ。リッヂを下りザッテルの雪を喰べる。

これから硫黄岳への登りだ百米程のギャリーとロックを登れば偃松だ。恐ろしく崩れる硫黄側のギャリーを登る。それからリッヂまで足場の多いスラブに出會ふ。これを過ぎて窓の樣な所に出た。長い間の岩登りはこゝに終つたのである。これから白檜や偃松のブッシュを漕がねばならん三十分程で雪のある草原に出た、池があり見知らぬ花が咲いて居た。なほ大体尾根を行くと草着きの急な谷頭に出た三角點までは凄いブッシュだから未だ十時前だが小晝にする大体尾根を辿つて行く身体の重いSはベソをかく。やつとの思ひで三角點に立つた。

此處から見た槍は鋸の齒の樣な北鎌尾根を引き連れて居る二人の若人は暫く無言であつたが握手をして互に祝し合つた。頂きの憩ひは短かかつたが貴いものであつた。種々の意味に於て山旅を終へた。歸りは二十五分ばかりで澤頭に歸つた。正午まで休んで澤を下る急な草附きを三十分程下りそれから恐ろしい急なガレを下るのであつた。草附きとガレの接觸點に雪溪があつて一寸惡かつた。ガレが終ると二十米程の空瀧がある。下るのは惡いから右岸の尾根を越え右手から入つて來て居る澤を五六百米程下る。

千丈澤が直下に見える所が瀧になつて居る。ワラジに換へ瀧まで下る。千丈澤に出て少憩の後澤を上つて行く、一時

間程で赤岳から來る澤の出合に來る。これは赤岳に登るに最も容易なローテである。雪溪があり勾配も樂だ。こゝから昨日歩いた峯頭が見える。なほ上つて硫黄澤乘越から偃松を終つた北ホタカ形の峰より來る澤の出合を過ぎて野營し翌日午前中に槍の小舍へと歸つた。

この連峯は北アルプスでは第一流のリッヂである。そして龍紋岩と石英斑岩、花崗岩の強度に風化した岩稜だ眞赤に燒けて居るのは鐵分が多いのでために岩質が一層壞れ易い。(完)

タイム。七月十五日　晴　風強　殺生小舍二八〇〇米午前七時攝氏一四度。—槍—肩三〇三〇米、七時十五分、—赤岳第一峰(北穗高形)二四六〇米、十時—十時半(積石があつた先月末法政の高橋某が登つたのである。)—第二峰十時三十分—第四峰十時五十五分—赤岳二四二四米(此處には立派な一寸板に千丈澤のベースキャンプより中山澤を登り云々と書いて肩書きがならべてある。中山澤とは赤澤の事ならん。自分の連れて行つた人夫の名を付けるとは一寸すぐつたい感がした。この連中は赤岳の峰を歩いただけで新聞紙上に硫黄まで行つた樣に霞登山の記を發表して居る。

ギャップ—十二時五十分、第一のトローム二時—第三のトローム四時二十分、ドーム狀の偃松ある峰四時四十五分—野營地二三〇〇米攝氏二十一度

十六日　晴　霧深　攝氏十七度五八〇粍を氣壓計は示した六時出發、第四のトローム(上部が二つに分れてる)六時半—硫黄岳の鞍部三三七〇米八時—硫黄岳二五五三米十時四十五分—十一時—無名澤頭十一時二十五分—十二時千丈澤二時—三時赤岳澤の上四時三十分。—野營地五時半、

十七日　晴，出發六時—西鎌尾根九時—殺生小舍十二時。

スキー靴をめぐりて

高橋昂

五年一昔、スキー靴も亦此の割合で進歩を續けてゐる。大正十年頃までは通學用の靴をそのまゝ重いアルペンスキーにつけて、當時のデスタンスレースは短かかつたにしろ元氣よく走つてゐたものであるけれど、スキー技の進歩普及につれてアルペンビンデングは漸次其の姿を消してヒットフエルトビンデングの流行となり、此のビンデングに對して在來の靴では幾多の缺點あるを知り、先人の努力により今では何處にあつても手輕にスキー靴として可成りによいものを購め得る位にまで普及してきたことは誠に喜ばしいけれどもスキーに就いての智識と研究心の乏しい職人と、良指導者の少ないことから止むを得ない事かも知れないが未だ實用から可成りに離れた時代物といふ感じが深い。一体スキー靴はあんな不細工な大きいものでなければならないのであらうか？ジャンプ用としてならいざしらず、レース用としては勿論のこと、クロスカントリー用としても不適當である、スキーは年を追ふて益々美くしい立派なものがどし〳〵出來てくるが靴のみはいつもながらスキーと並行せずに遲れ勝ちである。レース用と稱する細いスキーに大きな靴をつけてゐる姿を見たならどなたでもあまりよい感じもしまいし、又運動の上から見ても種々の原因からしてレーススキーの快速さも快味もともに消え失せることならん。

クロスカントリー用にしろレース用にしろ、一般に重過ぎもし、大きすぎるきらいがあるが、スキー靴はピタリと足に一致せんければいけない。靴下を多く穿いて靴と足との間隙を云々するなんては昔のことであつて、靴はピタリと

足に合つて居るならば心持ち小さい位で丁度よい。間隙のある靴はスキーと足との運動の一致を缺き、レースのみならずジャンプによつても勞力を無益ならしむること甚しく細心の注意を必要とする。

重量は各人が足の大小により幾分異つてゐるが其基準となるべき概量を記して見るに、レースなれば二五〇匁前後、クロスカントリーなれば二五〇—三〇〇匁程度、ジャンプなれば今少し重くなつてもよいが、最近にあつては三〇〇匁以内の靴を履いて居る人々は五指に屈する程度しかないし、又そうした靴を履いてゐるにしてもスキーに對しての良靴屋が殆んど見當らないために多くの不滿を忍んで居られることならんと思ふのである。

スキー靴は底皮は別として外側の皮は厚いのはあまり結構なことではない。厚い皮は足部の運動の自由を縛し勝ちであるばかりでなく靴皮の壓迫からして糸の部分の破損を早めるものであつて、多脂茶利皮とか稱する皮にあつて特に其の程度が大きい樣である。事實スキー靴の破損の大多數は縫糸にありといふも過言でなく、殊に土不踏の部にありて甚だしく其の他に於ては殆んど皆無と云ふてもよい。そうした原因からして薄手の質のよいロータス皮かボックス皮がスキー靴用として最もふさわしいものと信ずる。スキーをやつてゐて靴の濡れる位スキーの運動を不活潑ならしめ、スキーの快味をそぐことはないが其の原因を大別すれば

一、毛根及び縫目より入れるもの

二、足部の發汗によるもの

の二つであるが、前者は使用時間の長短、雪質、氣溫等にもよるが脂肪質の塗布によつて或る程度まで防ぎ得るもので、世人も注意を怠らないけれど、後者に就いての注意を拂ふものが甚だ少ない樣であるが、徒歩兵の行軍を見るに複雜な原因も他にあらうが、豆の原因は主として之に胚胎してゐることは全く見逃し得ない重大項目である。

大正十三年大鰐に於ける第三回全日本選手權大會に於て、四キロメートルレースに出場して優勝の喜びに脱靴するを忘れ其の足にて一時間直後の十六キロメートルレースに、後半八キロメートル附近から足痛に困却しながら走り續けて辛くも入賞した苦い經驗から其の後は如何なる短距離レースにあつても各レース毎に靴を脱いで手入することを怠

らないが、足部の保護法としては

一、靴の足によく適合すること

云々するまでもない

二、靴下の用ひ方に注意すること

膚に柔かい純毛の靴下を穿ち其の上に薄い木綿の靴下を用ひれば毛は汗を撥いて汗は木綿に吸收され、又外部から侵入する濕氣も之に吸收されて足部は常に乾燥してゐて心持もよい

三、足部の摩擦を防ぐこと

摩擦を防ぐものなら何でも用ひられないことはないけれど清潔を保つためにカンフルワゼリンかタルクパウダーがよい。就中カンフルワゼリンは凍傷豫防劑としても有効なものであるから廣く薦めたい。

レース靴は如何なる形がよいか？

レース靴として一定の形式があるのでないから各人の氣分にピタリと一致する丈夫で輕い靴ならどれでもよい。

スキー靴とラクビーフツトボール靴とは土不踏の比較的少ないこと、輕くて丈夫なこと等各點に亘つて類似の點が非常に多いのでラクビー靴に暗示を得てレース用靴を作らせて大正十三年には飯山大會、第三回全日本選手權大會（於大鰐）大正十四年には表日本選手權大會、第四回全日本選手權大會（於豐原）と前後九回の大きなレースに用ひて居るが總重量二八〇匁、總長九寸、深さ四寸、底皮二枚合、踵巾二五分、踵高五分、を基礎として製作上と使用上の注意とを書いて見る。

一、皮は薄くとも良質を用ひよ。

外側はロータスがよい。

底皮は皮の肉部を削りとつた皮の皮部で作れ。かくした靴底なれば二枚であつても如何なる劇動に對しても充分にその務をはたす。ピンデングの種類にもよるが底皮はスプリングの働きをなさしめる關係上硬くて彈力あることを望むが、ラングリーメンにありては他種に比して幾分軟くても差支へないことがある。

二、木釘を用ひよ

糸は切れ易い。特に春の雪やそれに似近い雪に對して弱い故に土不踏とトウアイアンの當る部に木釘を用ひることを決して忘れてはならぬ。木釘は濡れるに從つて特質が顯著となる。

三、内側には丈夫な布を用ひよ。

皮は濡れるとよくのびる。延びて大きくなつた靴では思ふ様に走れない。布を用ふると布は濡れてくると收縮して常に皮と反對の性質を現はす故に、長距離を歩んでゐる中に足をしめてきて大變都合がよい。

四、外側に皮のテープを用ひよ。

皮は濡らしたり塗油したりして用ひるとよく延びる。わけても糸目の少ない側方と甲部にあつて延び勝なものである故に、此の部分に巾二巾位の薄い皮テープを皮の外面へ縫ひつけると決して延びない。体裁を顧慮して内面に縫ひ附けると足をいためる心配がある。これは私の獨想になるもので一文字の條入りも無趣味なものでなし結果がよいのでデスタンス王國早大スキー部の流行兒となつてゐる。

五、靴裏の反りに就いて

靴裏のカーブは纖細な問題にしてよく筆舌に盡し得ないけれども大体に於て、踵から拇指第一關接の附近までは直線に近い方がよく、それより先の方は心持多くつけて五分位のところが適當の樣である。

先端と拇指第一關接との二點に於て、スプリング、挺子鍔番の三つの働きあることに注目せよ。

多數のランナーはカーブのない靴を望んでゐる樣であるが早大某選手が踵のない殆んど一直線に近い靴で當時の驚異的レコードを作つたとき、其の速度は靴にありと見て某校選手の總てが之に模してみたが歩行の自由を缺いて困却しきつたと云ふ逸話を殘したが、カーブのない靴は前方への蹴り出しに際して非常に不自然なものである

六、深さに就いて

深さは足首の自由を縛さない程度で心持淺い四寸位がよい。

七、踵に就いて

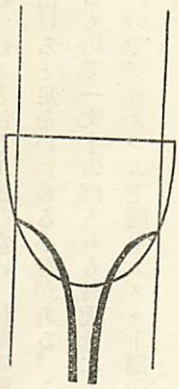
踵の高さは五—六分位までの低いものがよい。踵の高低の如何は急傾斜の滑降、ビンデングの位置、スキー厚さの變化等によつて速度と安定さに重大なる關係をもたらすもので概して低いのが安定である。

八、踵の位置とスキー製作上の注意

日本製のスキーを側方から見ると殆んど總てが中央部から漸次後方に傾いてゐるが外國製のスキーは中央部も踵

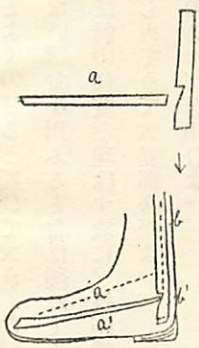
部も同じ厚さで、比較的高い踵の靴をはいてゐる我々にとつて之が外國製スキーを多くの人々が乘りこなせない一つの原因である。

レース用スキーにありては重量をよりよく輕減する目的からして踵の位置をして圖の如くあらしめるをよしとす



九、木形を用ひよ。

木形も色々あるが次の樣な輕便安價なものを一考して使用後の保存に用ひると大變工合がよい。



一〇、スプリングを入れること。

各人の希望によつていれても入れないでもよいが、入れた方が薄い材料を用ひても耐久力に富んでゐるらしい。通常の靴には白樺の皮が用ひられてゐるが之に代ふるに竹の皮部を削つて入れるか又は時計のスプリングを入れゝばよい。私は來る冬のオリンピックレースに使用すべく竹の入つたものを準備したが、以前にスプリングを使用して良好な結果を得たことから推定して必ず好結果を生むであらう。

—昭和二、一〇、二二—

利尻山の話

高杉正樹

利尻山について思ひのまゝに順序もなく書き連ねて見たい。

今でも幼い日に眺めた春の殘雪したその美しい姿や、又秋の初雪した朝の眞紅に輝く頂の壯嚴さをよく記憶してゐる。毎年島を廻る潮の流がぬるんで、鰊が岸へ壓し寄せて來て、綠の海がミルヒを流した樣に濁る頃になると、峯々は白い衣を脱ぎ始める。無數の里の小川が勢づく。日の光が雪を谷間に殘すのみの七月になると、山は美しい草花で飾られる。その頃、村の人達はよく山に登つたものだ。登つて歸つて來た人々は色々お山(彼等はお山と云つてゐる)の面白い話や、恐しい話や、珍らしい話を幼い自分に聞かせて呉れたのをよく知つてゐる。

其後確か自分の小學校の頃であつたろう。先生と一緒に始めてお山に登つた。其時は藥師岳まで登つて、草臥れて歸つて來たものであつた。之が山に登つた事の始めであつた。其後中學三年頃、村の青年達と一緒に藥師岳の先の谷間で雨に打たれてキャンプをしたのが第二回目であつた。其後は年に幾度となく登つてゐる。

× × ×

其頃夏になると、北大豫科の人達がよく登りに來たものであつた。今植物の教室に居られる館脇君などもその中の一人であつたらう。大層偉いと思つたものだ。其後加納さんが來たのをよく知つてゐる。加納さんは角帽に紺脚絆と云ふ素晴らしい出立ちで登られたものだ。それより前に、今奉天に居られる板橋君も來られたと聞いてゐる。それから少しして平塚君も來られたのを知つてゐる。平塚君は、

熊藏さんと云ふ山案内人を連れて、其頃未だ全く誰も通つたことのないコースを特に選んで登られたのだ。其後熊藏さんはこの方面に新しい登山途を開いた。相川君も來られたと聞いてゐたが、此の新しい途が出來てから後であつたらう。其後、鷲泊村からの古くからの途も大層手入れがされて立派に出來て、今では毎年澤山の人々が大した苦もなく登ることが出來る樣になつた。即ち只今では利尻山は甚だしく容易い山になつたのだ。

山に結ばれた面白い話が二つある。一つはお山を開いた行者の話で、もう一つは山の老婆の話である。

× × ×

何時の頃か小樽に近い高島の岬に一人の行者が住んでゐた。彼が何處からやつて來て其處に住んだのかは知らない彼は或日のこと、高い岡に登つて、よく晴れた空を眺め入つてゐた。その時北の方、海と空との合するところに利尻の島を認めたのである。その海から突き立つた高い山の姿は行者の登高の心を高めずには置かなかつた。

次の年の春早く、或る晴れた朝、彼の小舟は青い海に船出した。雄冬の荒海を越え、天鹽の無人の磯に沿ふて、幾日かの波路の末、彼は利尻の島に渡ることが出來た。島の荒磯には黑い波濤が寄せて居た。山は本だ眞白な雪で飾られてゐた。住む者も少なかつた。

彼は或漁師の家の世話に成つてゐた。晴れた日は岸の磯を傳ひ、辿るべき澤、登るべき尾根を搜し求めて彷徨つた。曇りの日、雨の日には終日祈つた。

斯くてその夏も過ぎ、秋、冬、そして再び長閑な春が來た　やがて又夏がきた。七月の或朝、長い間の精進に鍛へ上げられた彼は山に登る爲めに出發した。よく晴れた清々しい朝であつた。登るにつれて流が次第に細まつて、遂に彼は澤を登り切つた。やがて尾根に取附いた。それから上は物凄く這つて居るはい松の中を泳ぐ樣にして只管登つた吹き下して來る霧が彼をも山をも朦々として仕舞つた時には彼は經文を讀んで霧を霽らして進んだ。突然登る方向の分らなくなつた時には、常に彼は一羽の白い鳥が自分に途を示して吳れる樣に感じた。斯くして彼は遂に頂上に登りつく事が出來たのだ。彼は背負つて登つて來た佛像を頂の其處に安置した。そして經文を讀み、感謝の祈を心ゆくまで

捧げた。

祈りが了つた。山はその時よく晴れて居た。風一つなかつた。彼は七月の日にとける雪渓の水音が谷の底の底からかすかに聞えて來るのを聞いた。原始の儘の潮が四方の岸を廻つてゐるのを眺めた。涯も無い海には帆影一つ見えなかつた。斯くして行者は遂にその願を果す事が出來たのだ。

× × ×

山の老婆の話、それは自分の相當古い記憶に殘つてゐる彼女はお山に登る途が雪で全く鎖されて仕舞はない季節には、何時でも山の頂上のお社まで登つたり下つたりしたのだ。彼女は相當の齢であるのに、その山への往復は驚く程に速かであつたのだ。其頃山の途は隨分ひどかつたと云ふ話である。それで彼女を島の人達は『神さん老婆』と云つてゐたものだ。山の神に仕へる老婆の意味である。

或年の秋も末のことであつた。何時もより時刻も遲く彼女は頂上に登りついた。終日晴れて居た秋の日はもう西の海に近かつた。山も、海も、頂にある彼女も、總てが夕べの光輝の内に彩られてゐた。彼女は凍りつく樣なお社の前に祈つた。やがて彼女は下り始めたのだ。風の如く速に、はい松の根に縋り、岩を絡んで下つた。その時今まで晴れてゐた山の姿が急に見えなくなつて、物凄い雲のうねりが吹き下して來た。やがて霰が來た。次に霙が來た。日もすつかり暮れて四邊が暗くなつた。彼女は幾らか身動きが出來なくなる樣に感じて、未だ藥師岳まで下らない内に尾根から少しそれた、はい松の中にうづくまつてしまつた。遂に强い吹雪がやつて來た。剛氣な彼女も手や足の自由が今や全く利かなくなるのを感じた。やがて眠くなるのを感じたその時である。眞白な姿が吹雪の中から現れた。それは次第に彼女に近寄つた。然し彼女はもう意識がなかつた。その姿は恐しいと云ふよりは寧ろ崇高かつた。崇高いと云ふよりは寧ろ美しかつた。それは山の精であつたのだ。

以來彼女は再び麓の村々を訪ねなかつた。

× × ×

近頃は夏のお山は大層賑かなのだ。七月や八月の日は晴れてさい居れば人の登らない日はない位に繁盛する。

× × ×

所謂山の俗化は、色々の形で今や此の北の利尻にまで及んで居るのを確かに認めるのだ。然し利尻の山は尙ほそれ

が原始の儘である間から、自分の幼い登高の心を育てゝ呉れた山なのだ。今後如何にその俗化が進まうとも、自分は何時も、何時までも昔の儘にそれを愛し、それの『思ひ』の内に生きて行きたいのだ。

昔、そんなに昔でもないが『板さん』達の頃、この利尻の冬季登山が計畫されたことがあつたさうである。利尻山は未だ冬は登られてないのだ。その位置が北にあることやら冬の海の嵐をまともに受けて居ることやら、その他色々の點で難中の難であらうが、何時かは是非共征服したいものである。

もう手稻にも初雪が來た。このシーズンに於ける山嶽及び畑黨諸兄の御奮闘を祈る。（昭和二年十月十二日）

H・U・S・V 新着圖書

Neue mäglichkeiten im Skifauf

Winter sport in smitzerland

北道道のスキーと山岳

スキー年鑑

編輯後記

拾一月號を岡村源太郎君の追悼號として出す筈であらゆる努力を致しましたが遂に果し得ないで何等豫め御知らせもせず十一月號を休刊して十二月號を倍大號としました事を御詫び致します。

せめても吾々がオリンピック派遣選手後援の爲と又木原氏の労稿を以つて本號を飾り得る事とを以つて幾重にも御許しを乞ふ次第であります。

「山とスキー」バツクナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ります。御希望の方には喜んでお頒ちします。

第一年目

一號—十三號　絶版
十四號十五號　僅少

第二年目

十六號十七號　絶版
十八號—二十六號　僅少

第三年目

二十七號—三十號　僅少
三十一號—三十四號　絶版
三十六號　僅少
三十七號　絶版

第四年目

三十八號—四十九號　僅少

第五年目

五十號　極少
五十一號—五十三號　僅少
五十四號　絶版
五十五號　僅少
五十六號　絶版
五十七號—六十號　僅少

第六年目

六十一號—六十五號　僅少
六十六號　極少
六十七號　以下僅少ながらあります。

右の内二十六號及び五十號は倍大號につき定價金六十錢、他は何れも一部金三十錢であります。

昭和二年四月調

山とスキーの會

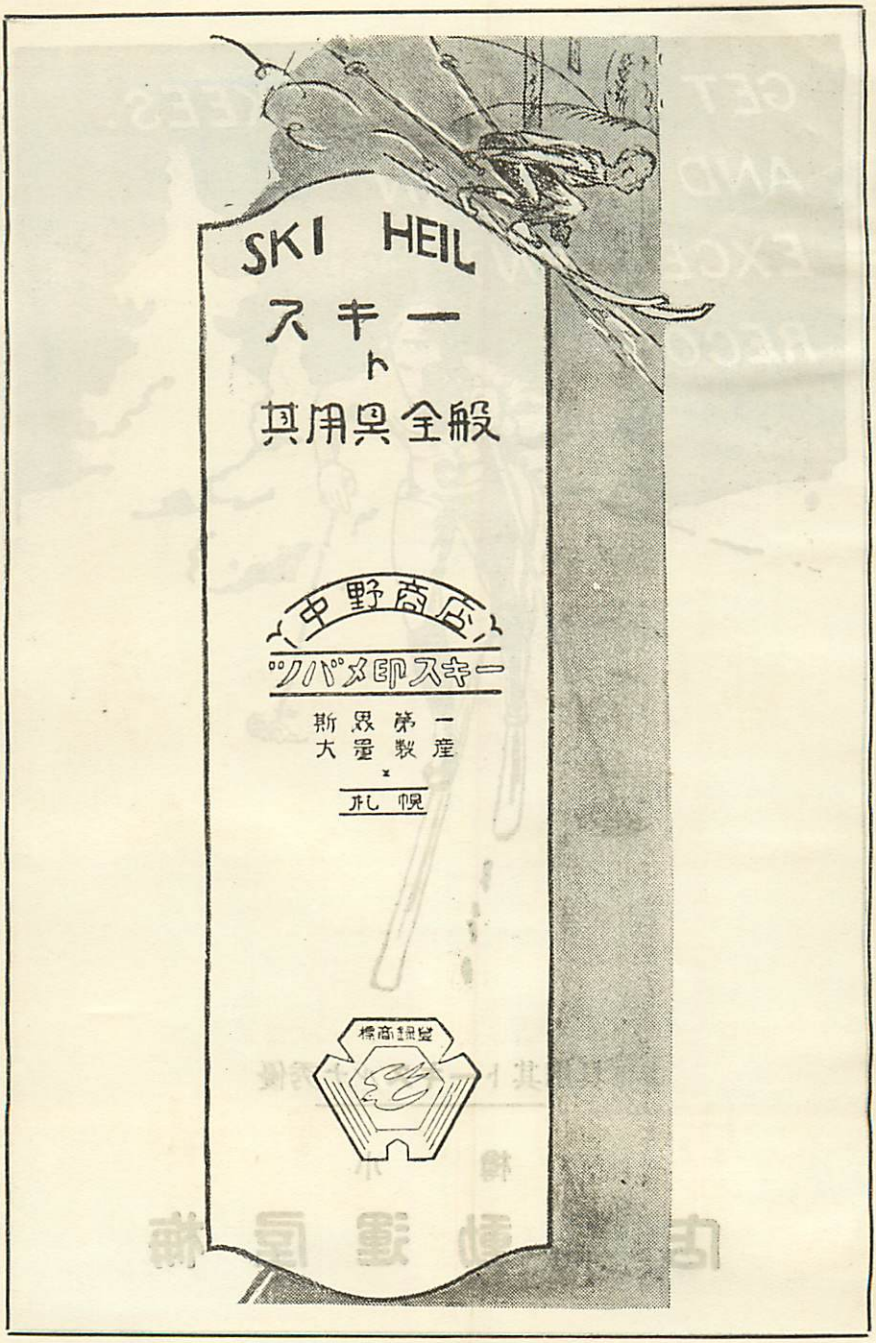
北海道帝國大學スキー部及同山岳部御用

登山靴とスキー靴

各種

札幌市南一條十字街

木本靴店


SKI HEIL
スキー
ト
其用具全般
中野商店
ツバメ印スキー
斯界第一
大量製産
札幌
登録商標

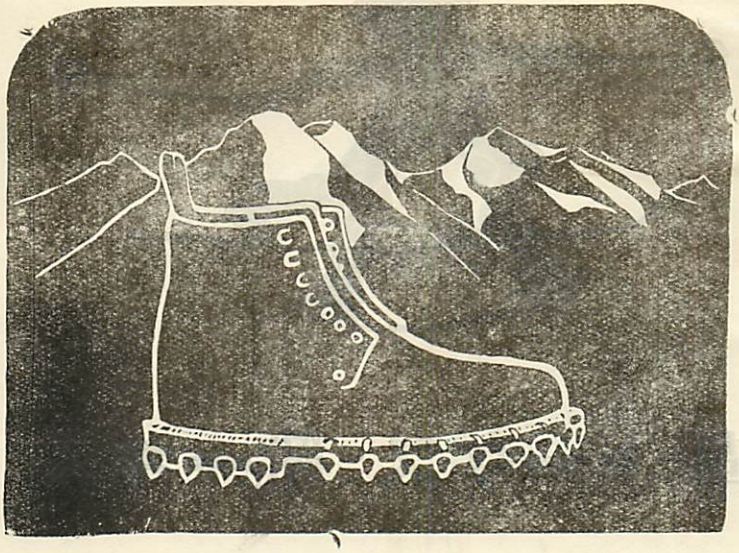
優秀ナルトーキス其用具

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



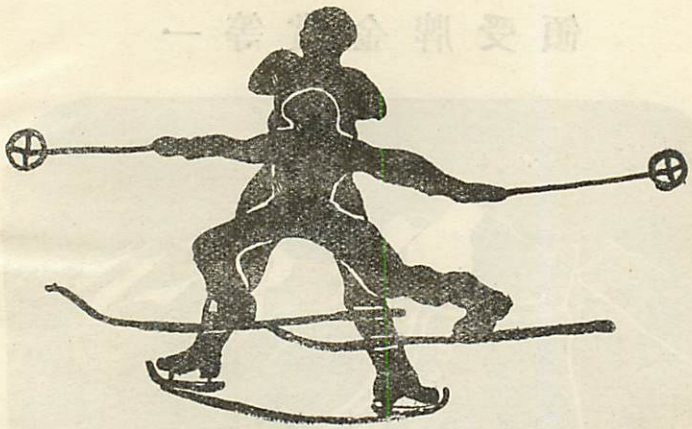
登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番



靴トーケスと靴ーキス

外各種

札幌市南二條西二丁目角

コマツ靴店

電話五九二番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年十一月廿八日印刷
昭和二年十二月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　井出英次
印刷兼發行者　廣田戸七郎
北海道札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北四條西十二丁目一番地
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 77. Desembro 1927. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年十一月二十八日印刷納本
昭和二年十二月一日發行

山とスキー 第七十七號（倍大號）

定價金六拾錢

美滿津特製
スキー用具と山の道具！
其他
アイス・ヤット及びボッブスレー
アイス・スケート新荷着！

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前

（切……取……線）

東京本郷赤門前
美滿津商店御中
下記の所へ型錄「秋より冬へ」郵送せられたし。
姓名
住所

東京本郷赤門前
美滿津商店御中
下記の所へ型錄「春より夏へ」郵送せられたし。
姓名
住所